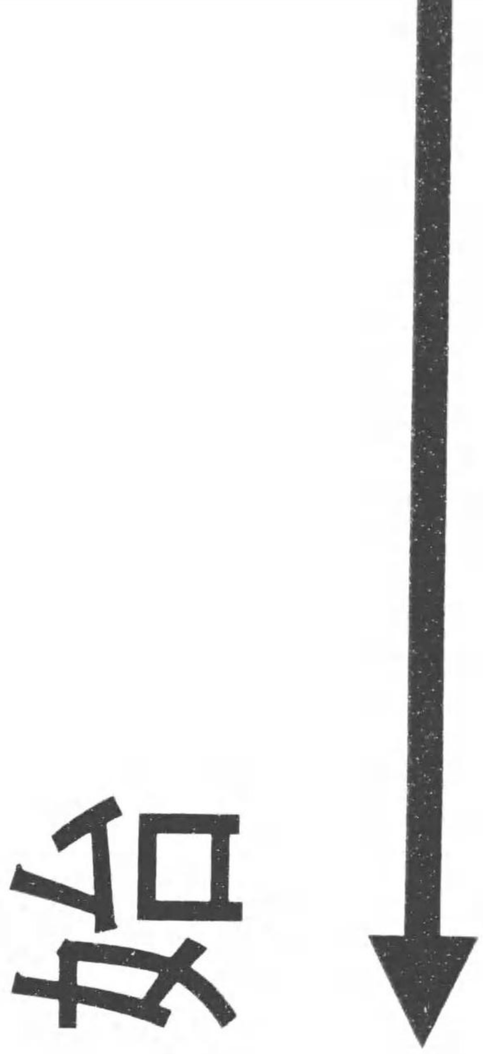

538
233

7.12.7

538-23

中世之文學
陳孝寬 校補

古川板謠曲

東京 岩波書店 發行

大正
14 6.23
内交

出合茶屋と色子（文政十丁亥孟春•江南亭唐立作•筆綾糸）

奥女中と出合茶屋（文政十）

（丁亥孟春•江南亭唐立作•筆綾糸）

柳橋藝者と箱屋（文政十丁）

亥孟春・江南亭唐立作・筆綾糸）

〈女郎買心得草〉

禿主坊　景光樓青

（奏色豔來潮色五•畫貞國川歌•作馬三亭式•春孟

裟袈と遠盛者武藤遠

孟丑丁年四十化文）　郎　女　局

春•式亭三馬作•歌川國貞畫•五色潮來艷色奏）

（文政十丁亥孟春）　内　平　条

（五柳亭德外著●北尾若國畫●森羅萬象心意氣）

夜鷹（天保十二年丑春●墨川亭

雪磨作●香蝶樓國貞畫　忠臣蔵替伊呂波）

（語物夢仇板年四十嘉元）　平業原在と后の條二

（奏色艷來湖色五•畫貞國川歌•作馬三亭式•春孟丑丁年四十化文）事色の子息と娘書樂

欠

して吉原廓内の人々が吉原の歴史を知り吉原藝術を知る必要があり、吉原に關する古川柳と交渉を持つことが先づ第一の務めであると云つてやつた所が、其返事は大意左の如くである。

大兄が川柳並に吉原中心の江戸趣味の爲に十數萬の財を投じ宣傳之れ力められたと云つてそれは大兄の道樂であつて、吉原には何等の關係はない。

復興後の吉原は甚だ窮地にあるも吾人は他に一毛の迷惑をかけず經營してゐる。趣味は趣味、營業は營業と區別してゐる。（評―しかして營業に趣味を加へ性の美化を企てることが吉原の眞面目と云ふことが分らない）何にせよ金もなく無智な官憲の野暮な壓迫干渉を受け不景氣な今日の吉原に寶暦天明の古吉原文化を望むは沒常識も甚しく且百年河清を誤つと等しい愚と云はねばならない。

仰御尤である。吉原の中心人物が已に此の如く川柳を解してゐない。江戸を解してゐない。それならば他の江戸子に江戸を解してゐるかと云ふに、天保嘉永の狂句

欠

若しくば月並發句に教育せられた人々であつて、變態的智識を通と心得、江戸と合點てしゐる連中でトテモ問題にならない。

（純な性情本位の感情へ融け込むことが川柳であり詩である事は一向にお分りにならぬのである。

されば俳句連はどうかと云ふのに川柳に人情のショックを與へる穿ちがある、月並發句にも穿がある、之を混用して川柳月並發句は理知の所産で非文學であり俳句の敵であり、駄洒落であると誤解し、川柳の輕味可笑味の藝術味を理解しない。そして僅かに個性滑稽の一茶位を理解する程度の貧弱の頭の持主である。

短歌に至つても藝術は崇高美で靈の淨化である。（そして性の美化が川柳であることは分らない）川柳は野幇間の如く小才の利いた駄洒落を云ふ者である。マコトにクダラヌものであると盲信し早斷を與へてゐる。

コヽに至つて吾人も最早再び爭ふ氣にもなれない。

まだ〳〵云出すと大變に長くなるから中止するが、此間川柳の何物たるかを知つて呉れたのは俳人中野三允兄一人のみである。深く感謝の意を表せざるを得ない。

一句近作を文末に併錄して序文に換へる。

一日も愚痴のない世界に住たい

（大正十三年十月卅一日天長の佳節蜀山人の書せし錦粧軒の下に　阪井久良岐）

狼か良犬か（自序）

川柳に解釋を附けるのは、野暮な沙汰だとの說がある。一應御尤もに相違ない。獨り川柳に限らず、苟も藝術なるものは熱もあれば血も通ふ一個の生物である。其生物をメッタヤタラに俎に上せて、解剖したところで、胃の腑や心臓の在り所は分るとしても、爲に却つて生命を損ずるの嫌があるからだ。多くの場合ッーといへばカーで受けるので味のある川柳に於て特に然りである。此弊は川柳をよむことの出來ぬ者が、川柳を解釋する際に著しきを惑ぜられるのである。然るにこゝに天保年中、岡本忠次郎とて後に近江守となつた人物が、或る地の代官として赴いたとき、邑を狼が荒すといふのを聞て、「毛屬蕃生國土恩、住レ山何得レ害ニ山民一、柝ニ看狼字一是良犬、諭レ汝自レ今 知レ愛レ人」といふ詩を作つたので、狼害が止むだといふことである。彼の「おのが名の傍を食ふ狐かな」といふ俳句で、狐の瓜を盗むを止めた話に

似て居るが、柝ニ看狼字一是良犬は、惡獸狼を解釋して良犬たらしめたので、此用意を忘れさへせねば、川柳の解釋も强ちに野暮なりとして排斥する譯に行かぬのみか却つて之を奬勵して可なりだ、要は狼か良犬かゞ問題となつて來る。

扨て然らば本書が狼であるか、良犬であるかと問はれた場合、著者としては、却て本書が狼であるか良犬であるか、忌憚なき批評を讀者の方から得たいので、敢て自ら良犬であると名乘る程の面皮を持合せないのを殊勝なりとして頂きたい。

（大正十三年十月三十一日小石川關口町なる俳毒庵樓上、天長の佳節を祝しつゝ執筆、中野三允）

○

本書の刊行については伊東月草、高木蒼梧、佐野平六栞、松田青風諸兄の盡力に俟つこと多かりしを特記せねばならぬ。（三允）

古川柳評釋　情本位

阪井久良岐補
中野三允著

緒言

江戸文化の爛熟せる寶暦、明和、安永、天明の年代に於ける江戸民衆なるものは、江戸ッ子としての一人格に結合せられ、享樂の抔に陶醉した。此環境から醞釀され醗酵した文藝に、川柳、黄表紙、洒落本等がある。就中此川柳は、他の追隨を許さざる、一種獨特の藝術價値を有し、江戸ッ子としての原始的素朴さが看取せられる。即ち其社會相のフィルムとして一線一劃何等修飾なき感情生活をリズミカルに十七音に纏めたものが川柳であるからである。性的の墮落も、生の倦怠も自身之を客觀

視し、煩惱の憂き世、衆苦の娑婆、執知の迷妄から超越して、虛空に花降り音樂鬨ゆる、天國淨土化せしむる、自覺なき懺悔とも見れば見られる。況んや其暗黑方面に取材せずして、光明方面を詠へるものに至つては、拍案嘆稱惜く能はざるものが多い。余は古川柳を醫藥衞生に關するものとか、小兒に關するものとか、種々部類別けにして徹底的に研究しつゝあるが、こゝに未だ他の新聞雜誌に發表しないで、性に關するもの、戀情に關するもの等が、圖らずも多數集積したので、直に書物として同好の士に問ふことゝなつたのである。但し編輯の體裁揭載の順序等に於ては、必ずしも多く意を用ひない。讀者須らく一句一句に就て評釋の適否を討檢せられて可なりだ。終りに評釋そのものについては斯道の權威阪井久良岐兄が控えて居るので、余としては如何に心强いか知れぬのである。

川柳に就ては其墮落せるものに狂句のあることを承知されたいのである。之れは別に詳論する機會のあることを約束して、今其說明を避けるが、本書にも他の類句

解釋の便宜と、狂句と川柳の異なる所以を事實に徵して會得されたい婆心からして、數句混同して置いた。此點豫め讀者の諒承を得たいのである。(三九)

○

川柳は人間の詩で、仙人亦哲學者や道學者の詩ではなくして生を享樂する都會人の詩である、丁度土佐畵の民衆化した浮世畫と同一で、唯美主義の現らはれが美人中心となつて表現される。從つて性に關する句が多い。

此性を眞に肉感的に受取るのは原始人の仕事で、江戸三百年間日本各地人の國際生活を續けた江戸文明人は、それを實感でなく不即不離のユーモアーとして取扱つてゐる。

此篇にはその性よりも寧ろ情的本位の句を蒐集されてゐる。或は時に性に近いのも取入られてゐる。

川柳はまだ各方面から研究されねばならない。東京市の習慣風俗に取殘されてゐ

る年中行事や、史蹟や、飲食や、衣服や、階級や、職業や、さまゞの方面からも研究されるが性情に古今の區別少なしとすると此書の出づることが第一着手たるは當然のことである（久良岐）

古川柳評釋（情本位）

中野三允著
阪井久良岐補

三神はなぶると讀みし御姿

（三允）和歌三神の御姿は、眞中に衣通媛、左右は住吉の神と人麿を描くそれが嬲といふ文字の關係になる。但し三神にも住吉社、天滿宮、玉津島社（後奈良院宸記、宣胤記）住吉社、玉津島社、柿本人丸（和歌三神考、和漢三才圖會）天滿宮、山部赤人、柿本人丸（類聚名物考）住吉の表筒男神、中筒男神、底筒男神（住吉秘記）等の諸說がある。玉津島社は衣道媛を祀つたのだ。

蜘やぐも孰れ妹背の大和歌

（三允）「我背子がくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねて知るしも」の和歌は、衣通媛が允恭天皇の行幸を待ち奉りての詠で、之れが蜘「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣造るその八重垣を」は、素盞嗚尊が奇稲田媛と共に棲み給ふときの詠で、之れがやぐも、どちらも戀愛の和歌だといふのだ「深情俚言婦女今川」の冒頭に「古人有レ謂、夫妻猶如レ瓦と人の道の根本これを以て始とするゆゑ、詩には關雎をおき、和歌には八雲たつの神詠をもつてはじまりとす」云々。

（久良岐）是は理智の勝つた句で後世狂句の基をなしてゐる、小子は此句を排斥する。

（三允）千代尼の俳句「衣通姫の贅」に「ゆふかぜに蜘も影かる牡丹かな」といふのがある。

やわくとおもみのかゝる芥川

（三允）業平が二條の后をそゝのかして駈落し、淀川の下流へ攝津から流れそゝぐ小川であるところの、芥川を渉つたときの光景を想像して詠んだのである。雅やかな狩衣を着、指貫裾を高く括つて、十二一重の姿艶かなる垂髪の后を背負つた樣には雪に此句のみでなく

下げ髪へ芒のからむ芥川
烏帽子着た川越しを見る芥川
行き當りばつたりと出る芥川
どこへ行く氣だか二條を逃げは逃げ
足弱をまめな男がつれて逃げ
芥川どつちも逃げる形りでなし

出は出たが二條の后立ちのまゝ

など未だ他に澤山ある、そして追手に向つた堀河の太政大臣國經の大納言のため后は都へと連れ還へられた。

性わるは阿保親王の五男なり

(久良岐) 此句は官能美の川柳として久保田萬太郎氏が「三田文學」で推奨したことがある、「やわ〳〵と引立て聞く葡萄の値」の類叙法句がある。

業平の道樂話し本に出來

(三允) 業平のこと、伊勢物語のことは、他にも屢々引き合ひに出してあるからこゝには略し、安藤爲章の「年山打聞」に○家持は美男といふ標題で「業平の容貌うるはしかりしを、世に云傳ふるは、伊勢物語をよむ人多きゆゑなるべし、家持の事は萬葉集ふるくより流布せざりしゆゑに、人知らず、萬葉集第十七卷平群氏女郎が

歌十二首の御釋に、家持は風姿の美男なりけるにや、第三の笠の女郎が、託馬聖紫深く思ひそめしより、第四第八及び此女郎に至るまで、あまたの女の心をくだけり」とある。

(久良岐) 類句に「業平の瘡をかゝぬも不思議なり」吉原全盛期の寶暦天明の氣持が出てゐる川柳。

(三允) 扨て此「伊勢物語」は別に伊勢に關するものが、主題として書かれてなく、その伊勢齋宮の記事の如き、他の諸記事よりも却て簡單である。從て本書題號の由來が判然せぬ。「此物語を伊勢と名けしは僻言物語と言ふ謎なり云々」との憶斷もあるが如何のものか。

業平は高位高官(下)女小あま

(三允) 業平の一生に契を結んだ女の數は三千七百三十三人だといふ、それが單

なる好色から來たか、或は皇室に對する忠誠からか、種々の解說を試むるものがある、伊勢物語なる書が何人の作であるか判然せぬ上に、謠曲「杜若」は「抑此物語は如何なる人の、何事によりて、思の露の信夫山、忍びて通ふ道芝の、始もなく終も無し」といひ、同じく「舞車」には「伊勢物語の奥儀を、くれ〴〵と語らんは、空恐ろし……」とある、又た伊勢物語の末部に「伊勢物語可秘可秘」と書き添えてある。それ等が單に藤原氏を倒さんための計略から來たのだとするのは、餘りに大袈裟過ぎた話である。業平に關する句は、川柳全盛時代に於ける江戸市民の享樂眼に映じたるものが、多數詠まれてある故、其等の句を評釋する場合に、適宜按配して長短宜しきを得ると共に以て遺漏なきを期することゝする。

性わるは阿保親王の五男なり

(三九) 右近衛權中將なる在原の業平の行狀を詠んだのである、……「勢語源

語の評」と題して「皇都午睡」に

儒道の人の口にかけては、伊勢源氏の物語は淫亂を導く媒なれば、年弱なる男女には禁じて見せまじき物也、然るに薦紳家に源氏物語を我國の寶といへるは、倭語の妙を得たるに心醉しての事なるべし、是に註釋して毛詩に淫奔の詩を擧、勸懲を示す人の戒、世の教とするは、俗にいふ杓子定木なるべし二南は修齋家の本也、雅頌は論道述德の辭也、國風はもとより、里巷の男女、各言情の詩なれば、正も邪もあれども、其邪と云も、媒介によらずして、淫奔なると云計也、何れか后妃を盗み、繼母寡嫂に淫する樣の事やある、伊勢源氏の如く邪淫の事、云盡すにはあらず、正を見ては自勸めて、邪を見ては自ら懲すぞかし、伊勢源氏はいはゞ長恨歌西廂記などの品にて、其冗長にして醜惡なる物他、然るに聖人垂教の書に比して云はゞ誠に氷炭薫蕕をひとしふするなるべしといへり。

とある。

（久良岐）娘道成寺に「どうせ男は悪性者」と昔の婦人の男子觀が現はれてゐる、現代は少し性惡を通り越した男子が多いので、女子の反抗運動が勃興し始めて來た。

まめ男衣冠正しく不埒をし

（三九）業平の情事である。まめ男は箸豆の男をいふ、三千七百三十三人の女であるから、まめ男の資格は十分だ、業平東下り及び能舞の姿は青衣であつて、五位の武官姿は紅色の袍であるところから、衣冠正しくというたので、而かも其癖淫奔なる行狀であるのを不埒とした、然るに謠曲「杜若」には「業平は極樂の歌舞の菩薩の化現」「本地寂光の都を出でゝ、普く濟度利生の道に、遙々來ぬる……」人物である「衆生濟度の我ぞとは、知るや否や世の人の……」「本覺眞如の身を分け、陰陽の神と言はれしも、唯業平の事ぞかし、かやうに申す物語、疑はせ給ふな」と、極力業平を贊美して居る、余曾て左の如き俳句を詠んだ。

業平の判に定まりぬ草合せ

古今和歌集の序で紀貫之が「在原の業平は其心あまりて言葉足らず、凋める花の色なくにほひて殘れるが加し」と評したこと當否は別とし、その業平に草合の判をさせるは皮肉の至りであつた。

業平のかさをかゝぬも不思議なり

（三九）「昔男ありけり」の伊勢物語は、人皇五十代桓武天皇の孫、在原業平の情史である。

まめ男衣冠正しく不埒をし
業平は高位高官下女小あま
業平はとある木蔭の元祖なり
業平の晝寢は大分あてがあり

金を使はぬどらは在五なり

此の如くに不身持な業平が梅毒に罹らぬものも不思議だといふのである。

（久良岐）此句の裏面には江戸寶暦天明期の江戸市民氣質が能く出てゐる、此時代は世も豐かで物價も安く、軍備擴張も市民の租稅も免ぜられてゐたから、可なり本能の美化が進歩して吉原が繁昌した、此故に昔の業平も好男子で定めて遊樂者だつたらうに梅毒患者にならぬのが不思議だ、定めしキヤツ地色斗稼いだ田舍者だらうの意も含まれる、「おらが瘡は吉原だと馬鹿な奴」の句がある、成程馬鹿者に相違ないが、それ程吉原を古人は推奬してゐた。

惚れた公家つけ短冊をして口說き

（三允）つけ文でない、つけ短冊、平安朝時代の雲の上人の戀物語りは是れ。

（久良岐）江戸時代は、幕府政略の一に創業時代諸强藩の家來の釣合上直系の家

來に十分の報酬の出來なかつた爲に諸大名の子孫のないのや品性上の欠點がある大名を取潰し、其知行を直系の家來に分與した、所が其取潰された大名の家來が澤山浪人と成つた、軍人の浪人故生活に窮しやゝもすると皇室を擔いで德川政府を倒さうとする危險性を帶びて來た爲め、德川政府は甚だ畏れ多いが、民衆の治安の爲め一つは自家擁護の爲め可成皇室及其御家來の公卿を抑制し浪人を近付けぬ算段をし財力も公卿に餘力なからしめたので、公卿は純文學者の立場に退き和歌を咏じ收入としては短冊を江戸其他諸藩の武家に賣つて月收を殖やした。

此理由に依つて江戸市民の眼には公卿と短冊とは離る可からざる物として映じてゐたので、民間の附文をシヤレて附短冊と云つたのである。

（三允）「關秘錄」に「短冊の寸法初りの事」と題して

短冊長一尺二寸横一寸八分程成物也、とりこ紙なり、十二枚に切つて短冊なり影

阿十二枚の白たんざくより初る、夫より前は短冊なきなり。

とある。

少將は少し風邪氣も押して行き

（三）川柳式連想である、酒落の輕味を解せぬ輩は之を智に訴へてゐるといふのだ、「小町ひめ色深草の少將が、戀には誰れしも行なやむ、しやくといふじにわかれても、敷居の高き門の戸を、雨かあられかはら〳〵と、わたしのりんきわぬしのわざ、やがて百夜通ふてそうならば、サァうれしいことじやないかいな、サッサこがるゝはづじやいな」といふ二上りの端唄がある。

（久良岐）雪中の訪問「少し風邪氣」と云ふ所が川柳の身上

氣づよいと氣の長いのが九十九夜

（三九）雪に思ひを深草の、百夜も通ふ戀の闇、君が情を……と來れば歌にも

踊にもなるのだに、九十九夜でおぢやんとは、通ひも通うたが、通はせも通はせたものさ。

（久良岐）此句の半面には江戸市民の、振り付ける遊女を意思の疏通を待つ迄吉原へ通つたことを示すもので、現代人の理解することの出來ぬ點である。

九十九夜供も同じく九十九夜

（三九）お供の方は緣の下の力持ち、御苦勞樣な話である。

惚れ帳を九十九夜目に消して置き

（三九）「開卷百笑」に「今は昔小野小町美人の名高く、歌は世に知れる所なり、」されば戀したはざるものなし、中にも深草の小將、思ひのたけをしらせんと雨のふる夜も雪の夜も通ひて車の榻に其數を書て九十九夜通ひしかど、此戀叶はずして焦

れ死せられしといふ取沙汰、女中達これを聞、小町のおそばへまゐり、少將さまにはつひにお果なされました、おいとしい事をといへば、小町聞て局を呼び、コレ其の惚れ帳を出して少將どの、所は消しておきや」

しつぽりと小町も一度雨にぬれ

(三九) 小野の小町の雨乞の歌「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとては又あめが下とは」といふのは後人の僞作であるが「ことわりを云ふ日は小町古袴」といふ句は之れから出たのである、眞の歌は「千早ふる神も見まさば立さはぎ天の川戸の樞口あけ給へ」と云ふのだ、扨て此の歌の效驗に至ては「上の句で曇り下の句ぶんまける」である、ためにしつぽりと濡れたといふのだ、それが一生にたつた一度といふに利かせてある、「關秘錄」に「小野小町之考」として「小町之事實歌學者流に種々の說有て、一決し難し、必つ竟古記の所見の分れ〳〵するゆへとぞ、爰に其傳

る證據こと〳〵く揚て、幼學日を費すの助にせんとて、詮す所小野と云ふ無雙の歌人、出羽郡司小野良實が娘にして、禁中に來り采女を勤るうちに長し、姿善しきにより、婬亂散逸にしてあまたの男に好色を通、終に容顏衰へて誰すさむ事もなく、生國出羽へ下り、死期に其骸をおさむる事もなく、和歌の名譽のみ千歲に殘りしものと落着すべしとなり」云々とあるが、一方には、小野の小町に穴がないといはれてゐる。それが三十二相揃て何處に一點の非を打つべき所もないといふのから出て居るといふ說だ、然るに實際妙齡の婦女の生殖器で、外部は何の異狀も見えぬが、膣の組織を缺如して居るため、結婚不可能の狀態にある畸形病が、今日統計の示す所によると屢々見られるといふことで、俗に之れを小野小町病と稱するさうだ、而して此病の手術による治療法も今日は行はれるに至つた等に察すると、小町を地下に起して聞かなければ、問題は不明に屬せしめて置かねばなるまい。

(久良岐) 小町は京都神泉苑雨乞の歌「ことはりや日の本ならば照りもせめさり

とては又天が下とは」で有名である、此雨乞の狀態を「去りとては又と云ふ時かき曇り」「上の句で曇り下の句ぶんまける」「打まきが下がつたのかと小町聞き」打まきは米の宮中詞である。此「去りとては」の古川柳を尾上博士が大好で、高女の試驗に出したら理解する者が極めて少なかつたのは博士も驚かれた、とう〳〵生徒の嘆願にて川柳はムツかしくてワカラヌから試驗に出さないで呉れと嘆願したので、博士も苦笑して中止されたことがある。

九十九で死ぬる命の哀れ也

(三九) 九十九夜を九十九といふ年齢の方に通はしたので、實際の九十九ならば長命であつて哀れといふ感じはないのだ「薄墨で昨十九日娘事」も十九の厄年に引かけたので、共に川柳表現の自在なる一形式……「小町思へば照る日も曇る、四位の少將がなみだ雨、九十九夜で御座んせう、仰せに及ばず夫やさう無うてかいな、

緒車に御簾をかけたかへ、此方や卒塔婆に腰かけた、エヽエヽばゞじやへ」といふ本調子の端唄がある。

(久良岐) 少々狂句臭

安珍はは した錢なごおつことし

(三九) 人皇六十代醍醐の御宇、延長六年八月のことである、陸奥の國白川なる安珍といふ若い坊さんが、常に三熊野を尊信するところから、紀州室の郡眞砂の庄司が許を宿として參拜したとき、庄司の娘清姫に口説かれたので、一時のがれに氣休めの和歌など贈答しあつて參詣にかこつけ庄司が宿を逃げ出したのを後で悟り、憤怒の形相恐ろしくも其跡を追ひかける、安珍の方では日高川を越えて道成寺に至り、鈎鐘の中に隱れる。

その慌はてた中故、はした錢などを落したことゝ想像されるのも尤もである。兜

巾など撫で〳〵娘口說いてゐ……鮫肌が氣障で安珍ずつこ拔け……首だけはとつくに越えし日高川……安珍は死ぬまでとんと隱れた氣……等の類句參照。」

首だけはとつくに越えし日高川

（三九）安珍の逃げた跡を慕て日高川まで來た淸姫、渡守は安珍に賴まれてゐるので船を出して呉れない、そこで女の一念は恐しくも蛇身と變じて、ざんぶと許り川へ飛び込んだ時、首の方だけは早く既に向の岸へ上つて仕舞つた……鮫肌が氣障で安珍ずつこ拔け……の句の由來もこゝにある。演劇でやる道成寺も、元來謠曲から出た舞で、頗る艶なるものであるが、琉球に今でもある「鐘魔」といふ狂言は安珍淸姫と酷似した傳說から來て居るのだ。男は松壽といふ美少年で、最後に女が蛇身とならずに夜叉となつたのである、尙蛇を女の執念深いに譬へ、神として祀るなどはアイヌの俗にもある。

道成寺鱗が肌のぬぎ仕舞ひ

（三九）蛇になつたのであるから、鱗までも脫ぐ譯にいかぬ、扨て「遠碧軒記」に道成寺の亂拍子の內に三度笛のひしぎあり、

亂拍子は、道成寺（金春）、住吉詣（觀世）、檜垣（金剛）草子洗（保生）、この四番に亂拍子あり

とある。

また「皇都午睡」には「道成寺」といふ標題で

娘道成寺の唱歌は、元祖中村慶子始てよりふしのよろしき文の佳なる物を此時集めて並べたる物也、ふつつり愔氣せまいぞとの條は、三勝半七長町の場の院本に有て、お園がさわりの文句也。かく當り文句のみ類聚にせし物ゆへ、此唱歌に添削ならじとしるべし。

（久良岐）寶暦の頃の名優瀬川路考が娘道成寺を演じて好評を博した「束ね慰斗釣鐘堂にのたを打ち」などの句も見えてゐる。此句も劇の光景を叙し、其名女形の舞踊の變化を寫して禮讃した意味が言外に溢れてゐる。最初金の烏帽子に赤の振袖に枝垂櫻金糸の模樣次が青色の振袖に引ぬいて變る、第三に又變化す、とう〳〵烏帽子を扇子で刎上げて釣鐘の紐に絡ませる、最後の肌着に引ぬきになると鱗形の縮緬の長襦袢でキッとなる、此光景の妙技を捉えて「道成寺鱗が肌のぬぎ仕舞」と讃美したのである。六代目の道成寺は過日好評であつた。自分は帝劇女優の臺覽劇娘道成寺を頭に描いて此句に對する。

惡る固い山伏めがと庄司いひ

（三九）清姫の父は、紀州室の郡眞砂の庄司である、道成寺の謠曲、安珍清姫が事は古き黄卷にも有て、謠曲に清姫が父をまなごの庄司に作つた、まなごは娘を深く寵愛すると云心であつて、眞砂を愛子と通はしたのであらう。その愛子の庄司が、自分の娘を蛇になるまで迷はした安珍を言つたのも同情に値ひする。

山伏の由來は、それ山伏といつば山伏なり……と、狂言の文句にあるが、「遠碧軒記」に

山伏者（出家の惣名なり、今は一種の名になれり）役行者徒也、或謂行者叔父願行是其鼻祖也、行之次曰義學一、學戴二頭巾一着二不動袈裟一持レ劍、其次曰二義玄一、其次曰二義眞一、其次曰二壽元一五代之後枝蔓布護、交二塞干寰宇一云

とある。

兜巾など撫で〳〵娘口說いてゐ

（三九）妾最早十三歳に及べり此度は是非奥州へ連れ行き玉へ……と清姫安珍に迫るの光景である、「皇都午睡」に「蓮葉女」といふ題で

婦女子のおとなしからぬを蓮葉女と云事は、西鶴が一代男に書有て、長唄娘道成寺の文句に吾妻育ははすはな者じやへと、故慶子（俳優長中村富士郎）が己れを謙退の詞也、此唄東都にては（浪華ヲ云フカ）都育と諷ふ、此名は浪華の宿屋にて客馳走の爲置たる女の名のよしにて、今も竹の皮のなき田舍にては諸品を蓮の葉にて包、藁にて括る下品なるを云也、（下略）

（久良岐）ユーモアーが巧みである、可笑味化した色出合ではある。

蛇になる脇ひらを見ぬ娘の氣

（三允）蛇は眞直に進むといふことから、たゞ一圖に安珍を思ひ詰めたる清姫の而かも事實蛇になつたのにもつて來たのである、全力を捧げて一人の男に戀する、田舍乙女の純一性といふ點に、お目を留められたい。

繪に書いた餅を師直食ひたがり

（三允）浴衣にて拭くを師直よつく見る……と句兄弟、魏志に「盧毓吏部尚書となる、文帝毓をして自ら代を選ばしむ、曰く卿が如き者を得ば、乃ち可なりと、此より前に諸葛誕、鄭颺、等名譽を馳す、四窓八達の誚あり、帝之を疾む、詔すらく、選擧に有名の者を取るなかれ、地に畫いて餅を作るが如し、啖ふべからざるなり」とあるに徴し、繪に書いた餅の由來は十分だが。扨て高師直鹽谷判官の妻顏世に贈したといふ歌「かへすさへ手にやふれけんと思ふにぞ我文ながら打もおかれず」とあるを、荻生徂徠が「我愚美人貽之書、美人不見棄庭除、吾拾吾書歸十襲、心謂美人手所觸」と譯した。

（久良岐）畫にかける女を見て徒らに心を動かす如し……の古今集序の名文句も連想される。

江戸衆は數がいけぬと輕井澤

（三允）川柳では輕井澤といふと、直に土地の女郎屋か若くは女郎そのものに取るのである。江戸衆の衆は働いた言葉だ。扨て江戸子とくると、口の方では威勢がよいが、輕井澤が大いに歡待しようと努めても、その方は割合に淡泊だといふのだ。

（久良岐）江戸時代に上州高崎迄は江戸の面影はあるが、輕井澤になると純田舍風に變つてしまふ。ソレを興味的に江戸子は感じて一の刺戟とユーモアーとを喜んだのである「輕井澤膳の央へすゝめに來」『輕井澤麥二俵のドラを打ち」まだ澤山類句はある。朱樂菅江の序にある「輕井茶話」は一九の「東海道膝粟毛」の前驅であつた。ソノ輕井澤の遊廓も明治以來岩村田へ移轉し今では二三軒に減少したとの事である。

神事だなとゝ親分氣の若さ

（三允）もういゝ爺さんであるところの親分が、何かのくづれで、若い者等と一緒に吉原あたりへ繰り込んだ、其夜の結果の報告が神事と來た。

（久良岐）昔は家出の子供を神隱くしと云ひ、意外の結果を神事だと云つた、佛語で云ふ因緣と云ふ意に近い、神事、親分などに能く實曆氣質が浮出てゐる。

かんのよい瞽女ろくな事しでかさず

（三允）ろくな事とはどんなことか知らぬが、それを仕出かさぬにも困つた話である、此瞽女の相手は「いゝつぶれやうさと瞽女を手なづける」

惚れ腐らかしにして居る內氣者

（三九）胸の中で思つてゐるだけで、言葉にもそぶりにもそれを現はすことが出來ない、上部からは何處から見てもほれたほの字も相手に感づかせない、恰も生魚を焚燒きもせずに腐かして仕舞ふと同樣であるといふのだ。惚れ腐らかしとは巧みなものた、そして下五內氣者とくる、一讀フフン……と感心しない人間は無神經な奴というて差支ない。

（久良岐）惚腐らかしは確に警語で川柳家に非らざれば云ひ得ない奇拔な語だと思ふ。

、若亭主出やうとすればさづけられ

（三九）何か口實を設けて遊びに行かうとすると、ぢや坊やも連れてお出でなさいとくる、さあそれは困るともいひ兼ねる、亭主の當惑に引き換へて、凱歌を奏した女房の眼の色、……若亭主とは此場合要領を得た言葉である。

（久良岐）自分は若い亭主が外出しようと思ふと、今日は日曜ですからチットこの赤ん坊を抱いて守りをして下さいと、赤ん坊をさづけられる意味に解して滑稽を感じたが、前說も大に一理あるやうに思はれる。

楢拾ひあやうい戀の邪魔をする

（久良岐）酒屋の小僧が、空樽を集めに路路や裏口へ這入る、と下女と下男とか乳母と番頭など、いふ手合が、主人に知れては大變な內所話をして居るところへ圖らずも出會した。

（久良岐）措辭巧妙

、ことづかるふみでほゝなどなでゝ見る

（三九）柳樽に掲載されてある句は、いふまでもなく川柳に相違ないが就中此句

の如きに至つては、所謂川柳らしい川柳といはねばならぬ。何の文とも斷つてはないが、色文と推して差支ないのだ、その文で無意識に頬を撫でる、一讀何ともいひぬ妙味を感ずるではないか。

（久良岐）無意識の擧動を捉えた所に川柳の穿があり輕味があり可笑味がある。正に是れ川柳の上乘、こんな句は現代人には作られない。

色男はしたに斗り產をさせ

（三允）墮胎させることをいうたのである。仲條へ五つ月置いて同じ顏……といふ古川柳參照の價値がある、當時は仲條と名乘て、墮胎を專門にした業務まであつたので、仲條へ供には過ぎた男なり……も情夫が供に妾をやつし子おろし處へついて來たのを詠んだのた。

（久良岐）「痢病やみハシタに醫者へ脈を見せ」など叙法の類句がある、マルサスの必要は排日問題の喧しい今日大に參考すべき點なきにしもあらず。

（三允）江戸時代に於ける墮胎、避姙劑たる朔日丸なるものが、詠まれてあつたり、避姙等については、仲條に關した古川柳が澤山詠まれてあるに依て、餘程面白い研究材料が得られる、今更らサンガー夫人に

霜月の朔日丸は茶屋で飲み

月なみをのみ〳〵下女はぞんざへる

など詠まれてあるに依て、餘程面白い研究材料が得られる、今更らサンガー夫人に傾聽せずともものことだ、此點は古川柳を根據として優に一の長篇を起草するに足るのである。

喰ひやうによつて黑鯛罪に成り

（三允）黑鯛を喰べると胎兒が墮りるといはれて居るからである。

、御代參ころんで歸るせわしなさ

（三允）芝とか上野とかへ御代參をした大奥の女中が、役者とか陰間とかを買て歸るのをいうたのである。

のびをする手に腰元はついと逃げ

（三允）腰元の用意周到なるをいうたのだ。

（久良岐）かう云ふ場面を巧に描寫する技巧は川柳獨得で大名とか旗下の家庭の一部面の演劇的シーンを捉らえてゐる。

聲をたてやすと腰元いけぬなり

（三允）口說いたがものにならない、いけぬなりは巧みないひ方。

、御背中をきつく流すが返事なり

（三允）湯殿で口說かれたときあからさまに、何ともいはぬが、合點の參る丈けの手答へは確に背中にしたといふのである。

（久良岐）類句「事ありと見えてお湯殿靜かなり」

あまだるい聲で殿樣おつかける

（三允）殿樣なるものゝ面目躍如、句意からは何の關係もないが「いやらしい下女前垂を踏みしだき」と對照し、ある殿樣、ある下女としての特色に一種の共通點を認める。

ごらに成るはじめは女房あばたなり

（三尤）道樂者になつた原因には多少の同情すべき點もある。「ちつとべいもはあるがと村仲人」

（久良岐）現代人は打算的で我慢するが、氣分や純感情を尊重した江戸の息子にはアバタは辛抱が出來ない。

精進をすれば後深誰がのだへ

（三尤）亡き先妻への悔氣である、其結果が「後添は鼠が出てもびつくりし」といふやうになるのである。

外聞の惡さ女房と下女が論

（三尤）女房と下女の普通のいさかひでなく、「お前よく下女をと後のむつかしさ」から來たのであらう、でなければ亭主殿の外聞の惡さ加減が深刻でない……

（參照）「色文を落して飯も食はぬ下女」……「いやらしい下女前垂を踏みしだき」、尙「譯準笑話」に「有ニ疏レ婦而泥レ婢者一其友晒レ之曰、何爲乃爾、豈非ニ月之與一レ鼈耶、其人曰、即汝坐レ不レ知ニ其鼈之味一也、

女房は土手のあたりで髪が解け

（三尤）吉原へ流連してゐる亭主を、嫉妬深い女房が自身向ひに出かけるをいうたので、髪が解けは安珍のあとを慕ふ清姫に比べ、土手のあたりもまた日高川を連想させて無理がない……（參照）「土手を行く女房目尻が上つてる」。

（久良岐）類句「傾城に女房面談する氣也」

（三尤）もう一つ「川ばたへ來た時髪はもうほどけ」

乳の黑みへ見せて旅立たせ

（三允）女房の用意周到、感服の外はない。

、色文を落して飯も食はぬ下女

（三允）飯も食はぬがよく利いて居る、心配の事情が如何にも下女らしい。

（久良岐）唯美主義から見ての滑稽。

兄さんと洒落れてせなあに逢ひに出る

（三允）「下女がいろ兄さん呼ばり憎い事」で、下女の戀の片鱗と解すべきである而してせなあとあるに徴し、奉公に來る前から關係のあつたのが諒解される……

（參照）「下女がいろいとし男が五六人」。

、仕合せは三世の緣を二世にする

（三允）世の諺に主從は三世、夫婦は二世とある、此句は主從關係にある下女が夫婦關係の二世になつたといふので仕合せはが利いて來るのだ「主の緣一世へらして相談し」參照。

（久良岐）これも理智の句で狂句素を含んでゐる。

當もなく下女ぶら〳〵と戀病ひ

（三允）誰と相手もきまつて居ぬのに……といふ處、如何にも面白い、

氣の弱い下女はつまらぬ子をもうけ

（三允）こゝにつまらぬ子とあるのは、權助などに袖を引かれて、浮氣からといふよりも、斷つたら何か仕返しされるのが恐わいといふやうな心持で、其結果身重になつてしまつたといふのだ。

（三允）内容の複雜を短詩で叙せんとして失敗し理智に陷つた。

口説いたを下女觸れ歩くその憎さ

（久良岐）かういふ下女は高慢チキで、且つ腦味噌が足らないのだ……よくよく纏つてるといふ感じのする句風である。

（久良岐）性の秘密を公言し其上醜婦であり肉的である、下女其者をやと唯美主義の江戸子の憤慨を代辯する句だが、ソレも只感じの上の憤りである。

いやらしい下女前垂を踏みしだき

（三允）「譯準笑話」に「主人被酒而歸、夜深人皆寢、獨小婢迎更衣、執其手曰可憐兒、婢驚擺脫曰、休作狂戯、强抱住相呂、囑曰、停回適汝所、請不寢以待婢怕羞身顫、峻拒弗允、既而婢竊俟、欹枕候聲音、良久竟不至拾是、遂不容已、自往就焉、則頽然酣睡、無復呶矣、婢乃搖醒曰、主公依前固辭」

しくじつて二十里上へ下女歸り

（三允）下女といへば相撲と相場の定まつた時代、江戸から二十里、フン成程、しくじつた仔細、御披露いたすまでもないこと。上（かみ）も妙々。

（久良岐）江戸ッ子は唯美主義の市民である爲め、美の對象を古遊君に認めた代りに只の色事で只の女の出來事を不美として屠倒したのだ、此意味が世人に理解されず、往々川柳は下女居候斗り惡口を云ふと早合點することを悲しむ。

薪水の勞を助ける下女が色

（三允）相手は權助か、薪水の勞とは巧みな言ひ方である……「飯焚に百ほどたのむ豆腐の湯」の如き、そんなこともあつたが……。

（久良岐） 君汲寒流我拾薪と天保度の漢詩人は歌つた、薪水の勞が堅い漢語を使つてユーモアーを出してゐる。

房州もやはか相模に劣るべき

（三允） 下女の色事……（參照）「北狄にやはか南州劣るべき」

（久良岐） 相摸下女は川柳に附物、それが狂句になりマス〳〵濫用した結果、狂句と下女居候とは附物となり川柳がトウ〳〵世人から誤解されてしまつた。

耳のわきかき〳〵お七そばへ寄り

（三允） 覗きからくりの文句にある「お寺さんは駒込の吉祥寺……」小姓の吉三と情事の一齣である。西澤一鳳の「皇都午睡」にお七のことが書いてあるから左に掲げる。

八百屋お七は湯島の天滿宮へ松竹梅の額を自書で奉納したりと世に云傳ふれど實は谷中感應寺の祖師堂に常在靈鷲山法華最第一と云額を、お七が十一歳の時書て延寶四年辰春二月と落欵せしを傳へ誤れり、

扨罪を得し事は十六歳の事にて天和二年戊二月也葬所も駒込吉祥寺といへど實は小石川指谷町南緣山圓乘寺といふ天台宗の寺也、お七が法名は秋月妙榮天和二戊三月廿九日と石碑に彫あり天和笑委集と云書にお七が事詳に記せり。

（久良岐） 此句は純然たる寫生の川柳で、單なる寫生以上に想像で劇的シーンを描寫して可憐な初戀の處女を活躍せしめてゐる、「耳の脇かき〳〵」が頗る描寫の妙を極めてゐるので他の文學の追隨を許さぬ所である、類句「祖師堂を先づお七が出吉三が出」とあるのも絶妙である、能く識者は西鶴のお七が私も十六でございますと云ふ吉三お七の對話を絶妙と推奬してゐるが、此等の古川柳も決して西鶴に劣るものでない、川柳が狂句低級の僞川柳の爲めに累せられて眞の浮世畫式川柳の世

人に認められない事を奮慨する。

、土手であひどこへ〳〵と手をひろげ

（三九）端唄本調子柳ばしから小舟でいそがせ三谷堀、土手の夜風をぞつと身にしむるもん坂、きみを思へば逢はぬ昔がましぞかし、かた〴〵今日はござんせと、そふいふ初音をきゝに來た」……「うしろから土手で見つけて目をふさぎ」參照。

たれながらそけへ寄りなと腮でいひ

（三九）吉原素見客の寫生である、小便をしながら、連れへ差圖するところの光景、イヤどうも何ともいへぬうまみがあるではないか。

、懐を廊下へよんで聞合は

（三九）一寸君こゝまで耳を貸して呉れとか何とかいつて、廊下へ呼び出し、いくら持てると小聲で聞き、それでは僕の方に之れ丈けあるから、かうしてあゝしてといふことになる、懐をがいゝではないか「生涯の耻辱廊下へはした錢」といふ句を參照のこと。

、傾城はとつぱづしても恩にかけ

（三九）千慮の一失といふ言葉も、この場合變な譯だが、兎に角何うしたはづみかに、とつぱづしたのだ、さういふッモリでなかつたのに……併しそこは商賣柄、直に之れを手管の方に利用した、然らば敢て問ふ、一體何をとつぱづしたのか二三の成書は放屁に解して居るが、さうでないことだけは明言して憚らぬ。

（久良岐）川柳は多く情本位の滑稽が多い「恩にかけ」が傾城の心理狀態を穿ち得てゐる、昔の遊女はお客より一段權威を有した者で花柳道德が然らしめたので現今

の心では理解しかねる。

(三允)「とつばづし」が放屁である場合もあることはあるのだ、本句の解釋には不必要であるけれども、「夫婦氣質」の「遠慮は淺からぬ夫婦中の樂」といふ中に「上畧、土藏の尻の狹き處へ無理に身を入れ、覗かんとて少しこごむに、腰卷にておいど支へて押す拍子に、振舞腹にこたへ、あたりも響く取はづしを、續けて二ッまですほんぶふうとやらるれば云々」とあるのを參考としてこゝに掲げて置く。

あひぼれは顔へ格子の痕が付き

(三允) 如何にも川柳らしい情味たつぷりの句だ、今は寫眞店となつて中に「入院中」なんといふ札が貼つてある樣に變つてしまつたんではお仕舞である。

(久良岐) 拙句「相惚のボートは島で小半日」

(三允) 端唄本調子「更て逢ふ夜の氣苦勞は人目をかねて格子先、互に見かはす顔と顔、眼に持つ涙袖ぬれて、エヽ意地惡な火の用心、はなす話も後や先」

憎うざんすと抓められるおもしろさ

(三允) 端唄本調子「淀の車は水ゆゑ廻る、わたしや惓氣で氣が廻る、眞にやる瀨がないわいな、實に遣る瀨がないぞへ。」

持てたやつ夜中おいていていをいひ

(三允) ヘンわらかしやあがる、お隣に獨り者の居るのを知らねぇかと、勿論他には聞えず呟やくさまが見えるやうだ。

(久良岐) おゝ痛い〳〵と云ふをオイテエテと古川柳時代には云つた「おいてえて行くよ〳〵と角田川」の類句もある。

(三允)「憎うざんすと抓められるおもしろさ」と句兄弟。

紙ばなもしばしの内の金まはし

（三允）新内の「歸咲名殘命毛」に「インエナ今日は女郎さん方に頼まれて、觀音様から大師様といふを幸はい代願し奉つる芝愛宕上野元三兩大師笠森稻荷跣足で百日家内安全裸體參りの濡坊主ア、つめたかろハ、、面白いういて來たお三喜作一つ飲やとひらり紙ばな二三枚枕にあて、假寢の話の中に高鼾搖れど起せどたはいなし」

（久良岐）紙花と云つても古吉原では客が半紙一枚折つて祝義に換へる、あとから金一分と引かへるのである。類句「吉原の鰐が見入つて紙が散り」鰐は遣手婆をたとへる。

雪ふらばよしとすつぽりひつ被り

（三允）端唄本調子「雪の朝寢衣のまゝのお坐つきが、ついした事で深うなり、今

は互に堰き堰かれ、ひよんな噂を聞くにつけ、もしや左樣かと案じて見ても鬱いでも只茫然と、疊算して袖枕」

（久良岐）類句「雀形叩いて雪の注進し」雀形は屏風の裏である、禿が雪がふりましたと敎へるのである、此句のあとに「引被り」の此句を續けて見ると非常に面白い、川柳は類句を集めて見ないと眞の面白味の出ぬ物である。

居續は二寸切らるゝ覺悟なり

（三允）端唄本調子「今なるはたしか上野か淺草か、阿呆鴉が笑うとまゝよかあいかあいと引きしめて、居つゞけさうな雨の朝、隅田の川風浮氣をつれて、脊の口說のさめごゝろ、仲直りすりや明の鐘」……「二寸切らるゝは一寸切らるゝも二寸切らるゝも痛さは同じといふ譯さ。

主の手でおん箸入と書きなんし

(三允) 吉原に遊ぶ客、初會、裏、それから馴染となつて來ると、自分の定紋などのついた一定の箸を供せられる慣例である、其箸入れに自分の手で間違はれぬ樣おん箸入れと書いて置けといはれる光榮に浴したといふのだ、此箸入れは普通紙で出來てるので、箸紙として詠んだ例句が澤山ある。その一つとしては、「おもしろくない箸紙を女房くれ」

(久良岐) こんな情趣も昔の吉原が民衆社交倶樂部として成立してゐたからである、現代は全く何所を見ても幻滅ならざるはない、今の遊客の通は女郎を誑して金を借倒す位の事アナ淺ましや〳〵

(三允) 「そこら中蓋を明け〳〵ていしゆぶり」も、馴染の男が相方の部屋でいろ〳〵な蓋を取て見るところを詠んだのである。

幇間禿に爪を取れといふ

(三允) からかつた時引搔かれるからである。

穀類を二日食はぬと太皷飲み

(三允) 太皷持にはよく其特色を現はしたものが多い、此句も亦さうである。飯も食ふ暇もなく、酒ばかり飲んで客の座敷を勤めるといふのだ、稼業柄酒の強いといふ自慢も含ませてある、飯のことを穀類といふのも、かゝる場合に出る言葉であつて、一粒の米も胃の腑に送らぬといふ意が含點される、「皇都午睡」に「牽頭幇間を太皷持と云は紀州の和歌祭に雜賀噺子に重き鉦太皷を二人宛して持行いかなる力量あつても兩方はもてず、鉦をもつ者は太皷をもたず、太皷もつ者は鉦をえもたぬと云謎々より名付しと云嗚呼ゆえあるかな」とある、「愚雜俎に」「俳優六頭子などに

取らする被物引出物の類を今世の俗これをはなと云へり、清土にも斯いへるにや、小説の書に花紅の字見ゆ、尤婚姻にも花紅の字を用ひたれど、褒美にとらすものを花紅といへり」

（久良岐）類句「飯はよい物と氣のつく松の内」も酒呑の情を云つたもの、幇間の句では「女房に舌は有りやと幇間云ひ」など、

、千代は句が上手と淺黄おもへらく

（三允）加賀の千代の有名な俳句「起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣さかな」……は良人を失つての獨り寝であるが、此句の主人公は敵娼に振られて獨り床の番をしてゐる時、圖らずも、千代の句を思ひ出して、共鳴を禁じ得ぬのである。淺黄とは淺黄裏のことで、川柳點では勤番の田舎侍を指す。

、

、禿來て武士がたゝんとまうしんす

（三允）「身が武士はすたつたは、やい若い者」で、敵娼に振られたので怒り出したところを詠んだのだ、「吉原で武道勝利を得ざること」といふのもある。禿が他の室に居る敵娼のところへ來て、侍の言葉そのまゝを報告に及んだところが妙だ、それに「申しんす」と廓言葉で續ける處一層の味ひがある。武士と而して禿の面目躍如……

手がきゝせんとめそ〳〵禿泣き

（三允）客のわるふざけからである。

疊算大跨に行く浮世ござ

（三允）端唄二上り「夜の雨もしや來るかと疊算、紙で蛙のまじなひも、虫がしらせて燈火の丁字も飛だ今時分、氣まぐれざんすエ、主の聲」……浮世ござは市松模樣に染めたる花蓆のこと、「仕舞には來るにしておく疊算」參照。

疊算一本の指の千鳥足

（三允）端唄本調子「辻うらや、まつまかんざし疊ざん、戀といふ字にひかされて、獨雪の夜忍んで來たに、はらがたつかやわしじやとて、だますこゝろはないわいな」……「疊算塵功記にも見えぬ法」參照。

（久良岐）此句は狂句臭がある。

けいせいの枕一ツはぢの内

（三允）お茶を引くことである。

毛氈へおん直り候へ鈴の音

（三允）「鈴の音」は見世を張る合圖に鈴を振るからである。「おん直り候へ」は三番叟の文句で、鈴に言掛けたのだ「鈴の音に來るのが客の三番叟」といふのもある。「毛氈を立つて帳場深く入り」だのと、毛氈といふものが、尊重されて居るが、遊里の方面でなくとも「吉祥寺雛にもうせん借りられる」ともあり、二世市川柏筵の老の樂」の中に　「上略、四つ過ごろ、增上寺大僧上、祐天寺へ御來駕にて、西運堂へおよりなされ、予が前お通り、予が妻子皆十念頂戴お乘物の内よりお言葉給はるなんと老母はと、予難有涙をこぼしき、向ふ性察和尚へお立寄、明王院より宵に毛せんかりに來る、それは僧正の、お敷きなさる、待もうけなり、かしてやりき」云々。等に徵しても、毛氈の價値が分るのである。

（久良岐）張店の類句　「毛氈に孔雀羽叩してすわり」も古遊女の美を禮賛した句

である。毛氈は現代の緞通絨氈等より珍重された物である。ソレを吉原の遊女が張り店に敷いてゐる横威推して知るべし。

勘定づくで疊の上のを買ひ

(三九) 毛氈でなく疊の上に居るのは安女郎である。毛氈の上に安女郎を坐らせるのは、一にはよく稼がせようとする奬勵手段であるのだ。「關秘錄」に「疊の事」と題して「疊の事は往古は禁中もみな板敷なり、夫へ圓座敷て何も着す、其後に疊を一疊の半程も、官位によりて敷なり、尤へりに官位夫々に付あり、大獻公の比までは、御臺所は藁藉也」とある。こゝに圓座とあるは蒲團のことで團の形に似たる故である。果して然らば疊も昔は大層なものであつたのだが、時世時節で安つぽくなつてしまつた、がそれでもまだ疊の上は、二十四文(夜鷹)の席の上よりはましであらう。

「鳳凰は三歩で鷹ははら四文」や「はら四文一両二歩も同じ味」は吉原の娼妓と夜鷹との比較である。ところが此所謂勘定づくには際限のないもので「きばらしに二十匁文はおほきすぎ」といふのが出て來る。

袖留がすむと明部屋授けられ

(三九) 振袖を止めて、留袖とし一人前の女郎とすると、部屋持となるのだ。「袖留は孫のかたづく程かゝり」「新造の袖死金に疵をつけ」で、年寄客の散財は免かれぬところ。

奥樣になつても松の脂が見え

(三九) 奥樣とあがめられる身になつても、松の位の大夫職であつた。昔の綵がぬけ切らず、言葉や身振りに現はれるのをいふのである。

（久良岐）松の脂は智覺に過ぎる狂句素で僕は川柳として採らない。」

色文を人中で書く勤の身

（三允）「清搔にあはせ蚯蚓をのたくらせ」といふ句もあるが、張見世をしてゐながら、色文をかく傾城の身の上を詠んだのである。普通ならば誰にも知れぬ樣に書くべきものを。

（久良岐）類句に「文など書いてゐるを揚ぐ可からず」

傾城の文はのぞくにかゝはらず

（三允）「色文を人中で書く勤の身」で他から覗かれても平氣で隱すこともせずに書くといふのである。

新造の夢は廊下をかけめぐり

（三允）眠がりの新造の夢を「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の芭蕉の句に因ませた。

抓らさんしよが叩かんしよが眠うおす

（三允）新造の眠がりである。「新造の鼻をつまんで歸るなり」參照。

新造はふる氣ではなし寢る氣なり

（三允）手練手管になれぬ若い身の、客と同衾して別に振るといふ譯ではないがぐつすり寢入てしまふといふのだ。

さかさまにすれは新造同い年

（三允）新造の客は多く年寄りであるといふたのだ、十六に對する六十といふ樣に。

追つかけて行くと新造ちゞこまり

（三允）禿上りの年若な、突出し前の見習女郎たる性格がよく現はれて居る。

（久良岐）「くすぐれば禿チヒ、と笑ふなり」の句も連想される。

毛氈へ乘て新造叱られる

（三允）「毛氈へ孔雀羽ばたきして坐り」で、太夫附の妹女郎といつた格の新造には毛氈の上に坐る資格はないのである。「勘定づくで疊の上のを買ひ」參照。

（久良岐）階級制度の嚴かつた德川時代、吉原にも儼乎たる花柳道德が行はれたソレが今日は何等の痕跡をも留めてゐない。吉原の亡びたることは已に久しいのである。

新造と白牛酪に入れあげる

（三允）白牛酪は補腎藥である「關秘錄」に「牛乳を煉る事」と題して「牛乳を煉て酪味、酪味を煉て生酥、生酥を煉て熟酥、熟酥を煉て醍醐、これ天笠に賞する五味にして最上の良藥たり、尤無上の美味とす」と說てある。

傾城に番頭の名は堅すぎる

（三允）大夫附の妹女郎たる新造の古參の筆頭を番頭新造即ち番新といふところから來たのである。

引込と號しおの字ではやらせる

(三允) 振新でもなければ、番新でもない。引込新造といふのがある。内所で育て上げられた新造であつて、源氏名を呼ばせぬ慣例で、お竹とかお松とか、普通の名を用ひるところから、此句が出來たのだ。

新造の口説かた〳〵古い聲

(三允) 古い聲、年寄客をいふのだ。

(久良岐) 古い聲は聲拔な詞である。現代でも七十八十位の老人だと江戸時代の音調で頗る古い聲の感じがする。吾人も青年の間に伍すると彼等に古い聲の感じを與へてゐる。

新造の座敷枯木に花が咲き

(三允) 年寄の客の形容である。それに花咲爺のことも連想される。通例赤味勝の振袖を着て居たので、振袖新造、更に振新と略稱される位故、花といふのだ。

(久良岐) 此句も理智臭い句で、吾人の作句中折々コンナ句が出來易いのであるソレよりも「新造の客は山屋の事と云ふ」吉原山屋の豆腐が名物であつたからである。句格上から云つても「新造の座敷」「枯木に花が咲き」と變格式二段切れになつて、正格の五、七、五の三段切れの句法になつてゐぬ欠點がある。

匁買は米屋箱買は材木屋

(三允) 「はかりに掛けて高尾はぴんとする」とある通り、高尾を秤に掛けたので匁買、米屋は仙臺米から來て居るので仙臺樣、箱買は密柑の箱で、材木屋は紀文。

（久良岐）「すきんせんこと、秤りにぶら下り」といふ高尾の類句もある。

全體が高尾米屋に行く氣なし

（三允）三叉で吊し斬りに逢つた高尾、身受けこそはされたが、初めから仙臺樣の意に從ふ氣はなかつたのだといふこと。

（久良岐）米屋といふ語が活きてゐて、柳味津々たる者がある。

女敵とおもへど島田齒がたゝず

（三允）相手が仙臺樣では、重三郎何と仕樣もない。

（久良岐）女敵打ちは背公許された、有名な槍の權三も女敵として討たれた。

ふつて名の高いは紅葉一つ松

（三允）滋賀唐崎の一つ松は近江八景の一つとして、所謂「唐崎の夜雨」である。紅葉は高尾の紋であるところから、高尾を指す。之れは仙臺樣を振りつける方。兎に角どちらもふつて有名となつた。

（久良岐）遊びの道の「ふる」と云ふ意味さへ現代人にはもう理解されぬ時代と思ふと少々心細い。

材木と竹がお客のかしらなり

（三允）「沖の暗いに白帆が見えるあれは紀の國密柑船」の主人公紀の國屋文左衛門、其後本八丁堀に材木の御用達を營み、紀文大臺としては、吉原の大門を打つたくるわの松をみんな買ふ材木屋

傾城を根太つ切買ふ材木屋

大きな門を材木でしめるなり

材木で通路のとまるきついこと

材木に巣をかけて待て女郎蜘

吉原で一人遊は材木屋

等の句が詠まれてある。そこで此の句の材木は紀文を指すのだ。但し深川黑江町の材木商奈良茂こと奈良屋茂左衛門の大散財もあることはあるが……

次に材木に對する竹は即ち「竹に雀は仙臺樣の御紋」で、仙臺樣を指すのである。お客は吉原の客であつて、かしらとつづいて「遊ぶかしら」といふことゝなる。仙臺樣の相方が高尾であることは勿論のこと。

（參照）「角錢と文錢えらいどらをうち」『夕買は米屋箱買は材木屋』

（久良岐） 昔の江戸市民は唯美主義の市民で豪放洒脫の美を喜んだ。ソレは市民と共に富豪や貴族が美の上に亭樂したから推奬したのだ。

、御鼻緒は何をすげたと小十郎

（三允） 「御放埒臣が一つの目にあまり」で片倉小十郎の片眼を利かせた、「伊達に目は二つ入らぬと小十郎」とゝある。これは政宗と自分とに當る。……伊達家の名臣小十郎をもつて來て、伽羅の下駄にすげた鼻緒は、扨て何であつたらうといふのだ。

（久良岐） 類句に「其頃の鼻緒印底亞かも知れず」と云ふのがある。

唐木屋へ下駄屋を雇ふ珍らしさ

（三允） 伽羅で下駄をこしらへるのだから、唐木屋へ下駄屋が雇はれるのだ。こんなことは、蓋し空前にして絶後であるに相違ない。

あるく度一二兩づゝ下駄がへり

(三允) 伽羅の下駄だから左もあるべきこと、一二兩を金目と量目と兩方に言ひかけたのであらうが、量目の方は問題にせず、單に金目に取つた方が、味にユトリが出るのである。

(久良岐) 江戸時代の一兩は今の一圓ではなく三十圓にも該當するのである所に句の興味がある。

履物に灸も据ゑられぬと高尾

(三允) いやな客若くは長尻の客を早く歸す呪は、箒に手拭ひ、下駄に灸、ところが此履物は伽羅で出來てるので、灸を据えればその薫りで感づかれる。

焚物を履物にする御放埒

(三允) 「たきもの」と「はきもの」で語呂を通はし、それが伽羅であることを合點させる、仙臺侯の遊蕩三昧。

角錢と文錢えらいどらをうち

(三允) 角錢は仙臺通寶の四角なところから來たので、文錢は紀文の文に因んだのである。仙臺通寶は「守貞漫稿」に「天明四年仙臺錢をゐる、是は幕府の許を得て伊達氏自國一州の用とするの鐵錢にて方形也、文云仙臺通寶他國に用ふることを禁ずれども往々交へ有之」とあり、文錢は同じく「守貞漫稿」に「文祿中文祿通寶の銀錢文錢あり(中畧)文錄錢は豐臣秀吉奏し請て所〻造ならん」とある。

傾城の誠四角な錢をふり

（三允）四角な錢は仙臺通寶を指す。高尾が島田重三郎に盡す誠から、仙臺樣のいふことを聽かなかつたといふのだ。

足の裏まで匂つてもものてぬなり

（三允）伽羅の下駄から、足の裏までよい香りがしてゐるのに、それでも矢張り振られるといふのだ。

（久良岐）かうなると智的に川柳を解する某氏の喜びさうな謎の川柳になつてくる。

無駄足に移香のする御放埒

（三允）傾城に好遇されての忘られぬ移り香でなく、振られて歸つた其足に、穿いたところの伽羅の下駄から、その匂ひを移り香に利かしたのだ。

伽羅の香に背中をむけて名を殘し

（三允）伽羅の下駄を穿いたところから、仙臺侯の熱心を伽羅の香に例へ、それを振るべく背中を向けた……。ツマリ仙臺侯の意に從はなかつたので、後世に至るまで高尾の名が高くなつてゐるといふのだ。

（久良岐）少しく說明に墮した句で智的になつて感服しかねる。

無駄足に召したは伽羅の御下駄なり

（三允）いくら通つても、自分の思ひが遂げられねば無駄足であるに相違ない、その無駄足で伽羅の下駄を穿いたとは、愈々勿體ないといふのだ。

客人でざんすと香の札を入れ

（三九） 香聞の遊びに、高尾から見れば、客人としての代表者は仙臺侯。それから連想される伽羅の下駄、即ち客人だといへば伽羅だといふことになるのだ。

（久良岐） 當時の權勢の貴族仙臺侯は高價な伽羅の下駄、香聞き、絶世美人の高尾かう道具が揃つてそして民衆に交渉のある唯美的な世界に川柳があるのだ。

平内へ内々伽羅の下駄も召し

（三九） 平内は衆の平内兵衛、淺草にある石像、戀の願ひが叶ふといふので痴男痴女の參詣が多い、それへ高尾に振られた仙臺侯が、隱れて出かけたといふのだ。二世市川柏筵の「老の樂」に平内のことが書かれてある。

稻葉家の臣取次役、小波又右衛門といふ、異風の物數寄にて、武士の像を作り、

淺草の寺内に建ておく今の久米の平内兵衛なり、今は其人の子孫、稻葉家になきよし其頃は智樂院とて、淺草寺も、上野の末寺ならず、無本寺のよし、其智樂院は又右衛門熱戀にて、地内に是をたつ、右平内兵衛は、又右衛門碁ずきにて、碁を樂しめる形ちなりと。

「再校江戸砂子」には左の如くある。

▲久米平内兵衛石形、ぬれ佛のわき此石形疑ふらくは鈴木正三石平道人の門弟にして二王坐禪の形相なるべし、力を願ひ又は癘疾等の願をかくる必願出をこむる。

補▲久米氏は九州の大家につかふ、浪人して當院内金剛院に借地して住、此石形は元祿七八年のころみづから造立の所なりと。

（久良岐） 平内は首切り手であつた爲め罪滅しの爲め自像を作り土中に埋め往來の人に踏付けて貰らふと云ふ意義を戀愛の願ひを達する爲め「文付け」の轉化で繁昌するとの說が一般的である。自分も淺草へ行くと懷古的に此像へ賽する。

（三九）西澤一鳳の「皇都午睡」に「淺草觀音の寺内に、衆の平内兵衛の石像有てよく人口に膾炙すれ共いつの頃の士何國の藩中と、慥に書しものもなし、内藤山城守の家中家富馬も二疋迄は繫しと也、剛質にて力業を好み、件の石像を存生の内に作らせ、死後に印とすべしとて庭に居置しと也歴々の侍なれども、石像拙なければ其跡卑し、雅を學ばざる人の失知べし」云々。それから「森羅萬衆心意氣」に「緣結の神」といふ題で「なむくめの平内さま、わたくしにふじゆうのない、ゆきわたつた男をおさづけなされて下さりませ、どんな男でもよいとは申ながら、いろの白いはなすじの通つた、あばたのない、すつかりとした男がよろしうござります、わるいと又とりかへますがせはでござります」同じ書に「衆の平内石の像」と題して「おれが事を、平ないさま〳〵といふほどつまらねへことはねへ、仁王ざぜんの石ぞうだものを、それに一七日かぎりなぞと、ひぎりを切てのうけ合、此ほうひきやくやではないハ、なんだそこへきたのは、ゑんむすびか、團十郎と菊五郎ふたりのうちにに

た男をむこにとりたい、そしてゑちごやか大丸をおぢさんにもつて、べつこうやのすみひこをおばさんにもつて、つむりのものやきものを、おもひいれこしらへたいトさて〳〵かほに似ぬよくばつたやつだむりなねがひにかのへさるトいふからしんどうへぐわんがけをしろ、そこへきたごけはなんだ、きよねんのあき、おつとにわかれて、ふじゆうをしておりますから、どうぞおとなしい、男めかけをせわをしてくれろ、此方けいあんでハないハ、ほうこう人口入どころといふかんばんの所へいつて、きいて見ろ、又そこへ來た男はなんだわたくしハ、おとどしの三月十五日の夜はじめてよし原へまゐりまして、しら川やの夜船と申す女郎になじみ、ことしで二ねんになりますが、いつでもわたくしがまゐるたびごとに、あさまで大いびきでねますから、いつかうたわいがございりません、どうぞ外のきやくがまいつたら、ねてもよろしうございますが、わたしがまゐりましたら、ねないやうにおねがひ申ますト「われも手前がつてなやつだ、それハかうしやれ、われが名が金といふな、そ

こでまづとこへまハつたら大ごゑではなしをして、そこで長居きんさんねづみとりぐすりとしろ」

朝歸り取あげばゞにしかられる

（三允）亭主が吉原のやうなところへ遊びに行つた翌朝、自分の家ながら閾の高い思をして歸て來ると、家内は產の騷ぎである。取上げ婆さん平素ならば、主人に對してはい〳〵いうて居るのだが、此場合まあ何處へ行て居たんです、と詰るやうにいつたのを叱られるとしたので、半ばは妻君の肩を持つたのだ、同時にもう赤子も產れ、しかも母子共に健かなのを祝ふ中に自分の手柄も含ませてある。

（久良岐）川柳としては人情の複雜を捉らえた句である。

朝歸り賴みに思ふ母は癪

（三允）「譯準笑話」に「蕩子數々遊二北里一、夜郷レ晨乃還、父恚不寐以俟、自啓レ戶詰責、子惶遽失レ措、曰自二吉原一回、父罵曰、亦說レ謊乎」

朝歸下女おはむきに不人相

（三允）「おはむき」は追從である、朝歸りの亭主に對して、女房の機嫌が惡い、すると下女もまた女房の態度を眞似てツンとしたところを見せる。

（久良岐）人情の機微を穿つて滑稽と皮肉とを感じさせる、現代人にはコンナ巧妙の穿ちは出來ない。

はら四文取つたか見たか夜鷹小屋

（三允）はら四文とは二十四文の略言である、句は取つたか見たかといふ言葉があるので、そのたかに引かけて夜鷹小屋といふたまで、言葉の上の酒落れである

が、手つ取り早くきまりをつけるといふ意も含で居る「客二つつぶして夜鷹三つく
ひ」參照。

文六に買はれた夜鷹くやしがり

(三允) 夜鷹は公娼ではないが、二十四文といふ枕代を標榜して、姪を霧いだのである、文錢六枚のこと、波錢(四文)六枚の代りに攫ませられたといふのだ、「手心で文錢を知る鷹の妓夫」參照。

なめかたで見るは夜鷹の蓆算

(三允) 傾城の疊算でなく、而かも波錢の背面が出るか出ぬかで獨り占ひをするといふのだ、錢のことも二十四文といふ枕代に利いて居る。

およんねんしと材木がものをいひ

(三允) 端唄本調子「辻君のたえぬ流れの思ひ川、戀にはほそる柳かけ、しばしとめたき三日月の、くしのひねさへさよ風に、さらりとゝけしあらひ髪、むすんできょき水の音」

(久良岐)「材木屋騒ぐと妓夫を呼付ける」などもある。

撰り屑で女衒切見世おつぱじめ

(三允) 切見世は局見世ともいふ、下等の娼戸軒を並べて居るのを局に見立てたのである。その間口六尺、奥行九尺程で、客があると内に引入れ、表戸を鎖したのだ「閉門のない切見世は不首尾なり」はこのこと、「切見世は突出すやうに暇乞」はその結果である、「切見世の口説一人は腰をかけ」「切見世は煙草のけむで霧が下り」

「行燈は百と百とのむすび玉」「かきたて、二軒あかるい河岸の顏」等で店の狹さが分る。斯樣な次第だから、多くは外へはめ込むことの出來ず持て餘した代物で仕方なしに女衒が切見世を開業したといふのだ「吉原のお局只の人でなし」が首肯される。

（久良岐）切り店と云ふ、切りは現代語で云ふと、一切り即ち時間制である、米國の魔窟にショード、タイム（短時間）オール、ナイト（終夜）の區別ある如く、現今の吉原に一時間金何圓四時間金何圓の時間制度を採用してゐる如く、其遊興の目的さへ達すれば直ぐ客の歸を、現代の千束玉の井龜戸の私娼窟の如き物で、吉原の他の大籬（大店）中店せ、小店せの終夜制と反し、切り店であるから最輕便で最下等の女郎屋である。目的の肉交本位を古人は如何に賤んじ本能美化の假像美を尊重したかが此句にて理解される。他の大マガキの美に對しこれは眞の醜さである。ソコに兀も安價な享樂を古人は滑稽視したのである。從つて美人の撰屑斗を集めたと見立て資本のない女衒即ち遊女仲介業者周旋者が最小資本でも開業されると嘲けつたのである。

（三九）「五色朝來艶合奏」に「こゝも名にあふかまくらの、七里がはまのあみうちば、つぼねながやのひとくるわ、あんまけんべきそゝりぶし、おでんしら菊大ふくもち、すれちがふたるぞめきのきやく、つい一トきりに百のぜに、おき手ぬぐひやほうかむり、三尺おびのぐる〳〵と、まはりなんしのひとむれが、ちよとひとまはり三尺おびの、ぐる〳〵とまはりふたながや、顏をみながやよつ五つ、時のひやうし木かなぼうの、おともひまなきにぎはひなり、けふはとりわけいろ〳〵とい事きく事たんとあると、そゝりはんぶん新内ぶし」

（三九）外と違ひ長くて一年の短期奉公から來たのである。

局見世暦のやうに年が明け

（久良岐）他の立派な遊女の年期は多く七年であるに反し、之れは一年ぎりの安女郎である。

切見世のたま〳〵目立つ緋ぢりめん

（三允）たま〳〵目立つがい〻。

（久良岐）偶々の二字畫龍點睛とも云ふべき措辭の妙がある。

切見世も品こそかはれ飲んでさし

（三允）品こそ變れが切見世の特徴を遺憾なく現はしてゐる、「鳳凰の末切見世へ舞下り」は狂句だが併し參考にはなる。

（久良岐）附差の吸付莨。

切見世はたんこぶ迄をうたがはれ

（三允）梅毒から來たのではないかと、普通の瘤までも疑はれるのだ。

（久良岐）輕妙な滑稽である、かう云ふユーモアーを現代人は輕く受取る妙を知らない。

品川の客にんべんのあるとなし

（三允）薩摩屋敷の侍と增上寺の坊さん、

品川はなじむと盛てくれるとこ

（三允）遊女屋のある所謂四宿の内の一つに數へられる品川は、遊びに出かけて馴染になると何か知らんが盛てくれるところだといふのだ。飯盛といふに因んだ

のである。岡場所で禿といへば逃げて行き……など、いふ句もある通り、吉原と吉原以外の遊女との氣位の相違を詠んだものである……(參照)品川へ來てながく〳〵の口直し

(久良岐) 落語家の大家が毎々說明して吳れる通り、昔は吉原遊廓を江戸文化の中心趣味の大タンクたる意義に於いて本場所と認定し、此文化意義の欠乏してゐる品川新宿板橋千住等四宿其他の遊廓を岡場所と稱し第二義的の物に認める、そして吉原の女郎は花魁、遊君、太夫、畫三お職など、尊稱を上るが、四宿其他はお職を板頭と稱し女郎を飯盛と稱する公の定めで、現代の酌婦と呼ぶに合致してゐる。ソレ故に剛染客に飯を女郎御手づから盛つてくれるとシャレたのである。類句に「大一座杓子果報のい、男」又は「矢一ッ來つて飯盛に中り」など澤山にある。矢一ッの句は謠曲兼平の文句取り川柳で當時矢の口渡新田神社が繁昌し土產物の矢の簪を買つて歸る、その連中が品川の飯盛に引かゝつたと云ふのである。

品川で厄をよけると太えやつ

(三九) 川崎の大師へ厄除の參詣を口實にして、品川で遊興するをいふのである。品川は日本橋から二里の道程、東海道最初の宿場で、增上寺の僧侶、薩摩屋敷の侍など、その定得意である、「守貞漫稿」に

「品川は武府西口の驛家にて官許の妓にあらずと云へども、天保の官命にも諸驛家の遊女の不レ禁ニ止之一、古より妓院を旅宿に用ひ、妓を飯盛女と稱し、旅客給仕の婢に嬌る」

とある。

(久良岐) 正月廿一日川崎大師の命日に厄除の祈禱がある、お詣りをかこつけに品川遊廓に引かゝるも耽美的市民の心。

北狄にやはか南州おとるべき

(三九) 吉原に劣らぬと品川のために氣を吐いたのであるが「當世武野俗談」に「品川の遊女、北州に比して、多くは結び髪にして眉毛甚だけんなり、人と交る事安くして馴染はやし、淨瑠璃を語り唄ふと云へども曾て絃に合はず、常に海上に馴れて能く客の楫を取りけり」

とあるに徴すると、容易く首肯も出來かねる、

「北狄」は杜審言の送二高即中北使一詩に「北狄頗二和親一東京發二使臣一」とある如く、北方のエビスである。北狄に對しては南蠻といふ語がある、即ち東夷、西戎、南蠻、北狄を四夷と稱する、「禮記」の「玉制篇」に東方を東といふ。髪を被り文身し火食せざる者あり、南方を蠻といふ。題に雕り、趾を交へ、火食せざる者あり、西方を戎といふ。髪を被り、皮を衣て、粒食せざる者あり、北方を狄といふ。羽毛を衣、

穴居して粒食せざる者あり……といふ意味のことが書いてある、併し品川を南蠻というては自漫にならぬので、南州と轉じたのだ。で此の南州も野暮な字義の詮索をするならば「南州溽暑醉如レ酒」と柳宗元の夏中偶作にあつて、意義をなさぬのだが、そこは川柳である。吉原を北州といふに對して南州と輕くしやれたのである。

馬鹿々々しい想像ではあるが、後世南州を西郷南州とし、征韓論破裂の時事に憤慨したのだといふ樣な見識の高いヨタ解釋が堂々と幅を利かすことゝなるかも知れぬ、殷鑑不レ遠在二夏后三世一……と詩經の文句、現代に於ける古川柳研究家微苦笑の價値十分である。

(久良岐) 江戸子表現派劇の「暫」のつらねに東夷南蠻北狄西戎の其中に云々とある、それをシャレたのである。

天人も裸にされて地者なり

（三九）「今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらむとすれば衣なし」飛行自在の羽衣を伯龍にとられては、普通の人間の女と變るところがないといふのだ、それが恰も花柳の女に對する素人の女として地者に當るといふのだ。

（久良岐）古人は地者即ち町家の女を非美又は洗練を經ざる物として斥け、美を盡くし善を盡くした古吉原の美人を推稱した。是れ現實主義の現代人の考えにはちと推察の出來ぬ境地である。

庚申の夜の一人寐は地ものなり

（三九）神稲水滸傳に……頃は寶永八年寅の五月初の事なりし、庚申の夜に當りて、嘉傳次夫婦双枕しける、妻は例の立願して、分て今宵は庚申の事なれば、三尸虫におかさるゝとやらんいひ傳へし事ある迚、夜更て絹つみの業を勤め、曉き方に成てふし所に入くるにいまだ嘉傳次も睡眠におよばず、かれこれ寐物語りをする

内に、互に色情きざして交合しけるに、庚申の夜は男女席をへだつる習ひなるに、今宵に限りて淫念を發し、交合しけるが、ひつ竟悪事の種とし、子孫をたつべき因縁なりとうたてけれ……とある、地者とは遊女に對する所謂素人の女のことで、昔は吉原が單なる性の關係でなく、江戸市民社交の中心をなしてゐたので、遊女を見る目も自然今日とは異なるものがあつたのだ、で……生んだのを片輪のやうに五丁町……といふ句のある如く、遊女は子を孕まぬのが普通だから、庚申の夜でも常の如くに客をとるといふのが此句の覗ひ處である……類句寐て用がないで庚申夜を更かし……の句も、意義自ら明瞭であつて、同時に之れは遊女とは關係なく普通の家庭に於ける場合を詠んだものである……（參照）こんみりとするは地者のありがたさ。

（久良岐）庚申の古句は澤山にある、が、併し多く末番に屬してゐる、

こんみりとするは地者のありがたさ

（三允）官能の法悦である。所謂素人女の閨房の趣が、遊女などの商買道具と撰を異にして居るのを賛美したので、それをありがたさといふたのだ。こんみりはこんみりで其儘に受入れる方が、意味深長だ。

地者だと陰間の笑ふ寺小姓

（三允）陰間なるものゝ隆盛を極めたのは、明和安永の頃である。即ち芳町、木挽町、神田八丁堀湯島天神社内、芝神明前、麹町平川天神社内、市ヶ谷八幡社内等の十箇所に及んだ。主に役者の女形になる下地ッ子などが出たのである。野郎、色子、舞臺ッ子、などゝも呼ぶ。御殿女中や後家などの女性も買ひに行くが、坊主や武士などの同性のものゝ方が多かつた。平家源内の戯筆として最も著名なる「根南

志倶佐」前篇五卷、後篇五卷は瀬川菊之亟（路考）といふ絶色なる女形を主人公とした男色の本であるが、中に

閻王以ての外怒らせ給ひ、「いや〳〵彼が罪軽きに似て軽からず、都て婆婆にて男色といへる事ある由、我甚だ合點行かず、夫婦の道は陰陽自然なれば其はずの事なれども、同じ男を犯すこと決してあるべからざる事なり、唐土にては久しき世より有て、書經には頑童を近づくる事なかれといましめ、周の穆王は慈童を愛して菊座の名始り、彌子瑕董賢孟東野が類、また日本にては弘法大師渡天の砌、流沙川、川上にて文殊と契をこめしより、文殊は支利菩薩の號を取り、弘法は若衆の祖師と汚名を殘し、熊谷の直實は無官太夫敦盛を須磨の浦にて引こかし、ハリハドッコイなされけるとうたはれ、牛若は天狗にしめられ、增賀聖の業平、後醍醐帝の阿新、信長の蘭丸、其名を高尾の文覺六代御前にうつゝをぬかし、いらざる謀反をすゝめこみ、頼朝のとがめを受けしより、婆婆にて尻の來るといふ詞始

れり、但馬の城の崎、箱根の底倉へ湯治するもの多きは、皆此の男色あるゆゑなり、昔は坊主計りがもて遊びし故にや痔といふ字は病冠に寺といふ字なり、しかるに近年は僧俗押なべて好むこと甚以て不埒の至りなり、今より娑婆世界にて男女相止候樣に急度申渡すべし」云々

「皇都午睡」にも

男色はもと天理にそむける邪淫にて、在家出家の分なく皆いましむべし、大明律に云、以陰莖放入人之糞門者杖一百此刑の放とは無理にと云事、無理業をすれば杖一百との義、若衆は男色を賣るも相對なれば杖に不及か、中富郎(祖度子富十郎)と云男色、暫時を金千疋の價を以て春宵を壓たり、暫時に千疋を臭淵に投る者、必杖一千と淡々(俳諧師半時庵)は云へり、近世迄東都にて葭町、京に宮川町、浪華坂町に有て、若衆、野郎、新部子(シンベコ)、世外子(セグワイコ)、影間杯多名有、成長に及びては俳優の若女形となる。娘方の内を新部子又制外子とも云也、いまだ舞臺に出ぬを影間

いふ、他國を飛めくるを飛子(トビコ)とは呼ぶよし

陰間は天保の改革で全くその影を沒したのである。

扨て此句の解釋は、陰間自身を吉原の遊女に例へ、寺小姓を地者だと笑つたといふのである。寺小姓なるものも其寺の坊さんの寵を受くることが多かつたから來たのだ。地者のことは他の句に於ても解說したのを參照されたい。

(久良岐) 唯美主義の寶暦天明期の江戸市民は華麗を盡くした吉原の遊女を理想の目標として美の權化とし、民家の女子を地者と稱し非美的の物と見做してゐた。和合を地色と賤んじた。此句はソレを男子へ持つて來て滑稽化したのである。

芳町(よしちやう)へ行くには眞似(まね)をせずとよし

(三允) 妓樓へ登るには、坊さんが醫者に化けて行くが、芳町へは法衣のまゝで行て構はぬのを詠んだのである。……「丸ぐけを出せと芳町大口說」參照、

芳町へ羽織を着ては派が利かず

（三允）「芳町へ行くには眞似をせずとよし」であるばかりでなく、之れは一歩進んで法衣でなければ持てぬといふのだ。

（久良岐）「四つ手から衣のさがる憎い事」などもある。

土手で遇ふ和尙笹原走るなり

（三允）脛に傷もちや笹原走るで、醫者の風體をして、吉原土手を行く坊さんの知人に遭遇した時の弱味を例へたもの。

脇差をさすと和尙も面白し

（三允）坊さんが醫者の風體をして遊里に出かけるのを評したのだ。脇差即ち小刀を腰に差し、黑羽織などを着て行くのである。「譯準笑話」に「僧遊二妓館一、見レ問二宗派一、僞稱二本頭寺門徒一、適二十八日、爲二親警忌辰一、命二厨婢一曰、敬奉二寺饌一、

脇差をもどせば茶屋はかのを出し

（三允）坊さんが醫者に化けて脇差をさし遊所へ行つた、その歸りでもとの僧形に戻る仕度をするのを詠んだのだ。

（久良岐）「かの」と云ふ語は實暦天明に限つてゐるやうだ、現代のアレと同一語で、有名な蜀山人の狂歌

詩は五山書は米店に傾はかの
藝妓小萬に料理八百善

とある。又川柳に「吳れなけりやかのをしやれと妾の母」小便組の妾の母で、かのは小便である。

能く聞けば女難で納所身をひかれ

（三允）此頃顏を見ぬが何うしたこと、、納所のことを寺男などに聞いても、始めは曖昧の答へばかりで、判然しなかつたが、よく質してみると、イヤ實はその女のために、寺に居ることが出來なくなつたのでといふ次第である。

（久良岐）大和向が能く女難に罹つて傘一本で寺を逐出されたり、日本橋高札の下に三日間晒し物となる。ソレは能くある例で、ソレ相當の原因結果の釣合も取れてゐるが、味噌坊主の納所にまさか女難などの贅もあるまいと思つたが、イヤハヤ飛んだ臍茶の至りさ。

文覺は一杯喰つた坊主なり

（三允）渡と思つて掻いた寢首は意外にも袈裟の首であつたので、一杯喰つたこ

と、なる文覺上人、當時の俗名遠藤盛遠、年齡は十八歳、渡邊橋の供養の折、既に定つた夫のある、姪の袈裟御前に横戀慕をなし、是非に己が妻に申し受けんと叔母衣川（袈裟が母）を恐喝した。

（久良岐）此時代には「一杯喰つた」といふ詞が刺激があつたのであらう

町内でみんな忌服のある娘

（三允）尻輕女の死んだに付て……である。湯屋や床屋での評判察するに餘りあり。

腰繩の氣で母親は苧をあづけ

（三允）腰繩は囚人の腰に結付ける繩である。母親が何か用があつて外出をする時、これだけうんでお置きと、苧をあづけて行く、歸つた時その成績を調べて、娘

が脇目もふらずにうんで居たか、或は男とふざけて居たかゞ分る、母親としての娘に對する心持のうなづかれる句だ。

（久良岐）自分も少年の頃老祖母が、手製の紙張の味噌コシ樣の笊に麻をよくうんでゐられた姿を思ひ出し、實暦の江戸の家庭の習慣も思ひやられる。今日なら毛糸編みといふ所だ。

我がすかぬ男のふみは母に見せ

（久良岐）此句の裏面には、自分の好いてゐる男の文に對する場合が連想される（參照）目の内へ入れて母親ちゝくられ……色娘男の顔へ難をつけ……いひ出して大事の娘寄りつかず……どこぞではあぶなき娘ゆふべ遣り

かゝ樣が叱ると娘初手はいひ

（三允）初手はいひ……事件を複雜にする。

（久良岐）これも性を巧に取扱つてゐる。昔の娘、家庭本位のかゝ樣を恐れる所に娘の情が描出される。

抱いた子にたゝかせて見る惚れた人

（三允）自分でたゝくのは氣まりが悪いので、抱いてる子にたゝかせる、それもそつと後から……すいたのが來りや抱いた子と頰摺し、と句兄弟。

團扇では憎らしい程たゝかれず

（三允）惚れた弱身も手傳ふとこへ元より痛く叩く氣ではないので、冗だんに嬲られたのが、内心嬉しくあるけれども、口先丈けは憎らしいと、ツマリ團扇で叩く眞似する程度のものである。

、すいたのが來りや抱いた子と煩摺し

（三允）此の邊が西洋と違つた情味とでもいつて置かうか　謂所現代人からは舊い陳いと貶されるかも知れぬけれど。

（久良岐）江戸娘は俠であるが一面露骨でなく、情緒的の動作に富んでゐる所が吾人の可しとする點である。

疳癪のやうに目をする色娘

（三允）「譯準笑話」に「有レ女懷レ春、抑鬱成レ瘵、飲食少レ進、容顏日悴、乳媼來看レ病、密問二其所一レ思、女羞澁曰、媼說二何事一、媼曰、雖二則云一レ然、必有レ以也、請展レ溫以告、願周旋有レ濟、如二某氏郎君一、以爲二何如一、女他顧不レ應、歷二舉里中有レ委者、皆若二漠然無一レ情、媼曰、都不レ中レ意乎、女乃莞爾曰。不二必擇一耳」

十六で娘は道具ぞろひなり

（三允）女としての要件を具備したといふのである。

十三と十六たゞの年でなし

（三允）十三と十六……成る程たゞの年ではない、特に昔の早婚時代に於ては……。

（久良岐）十三何々、何十六の俗語がある。

（三允）年こしに十二の禿蹴られる……も十三がたゞの年でない參照となる、また清姫は安珍を口說いて「妾最早十三歲に及べり此度は是非奥州へ連れて行き玉へ」というてゐる。

やぼむすめ兄の友達一人切れ

(三允) 享樂眼からの洒落れで、やぼ娘と見るけれども、良家の處女として、かうでなくてはならぬのだ

色事に紺屋の娘うそをつき

(三允) 紺屋を色事に利かせ、また紺屋のあさつてで、嘘をつくのが當然のやうになつてゐる、それで「約束を違へぬ紺屋あはれなり」といふ句まである位なのだ。その紺屋の娘が、自分の情夫に對して嘘をついたといふのだ、低級なる興味から作つた句で、二度と讀み返して味ふ丈けの價値はない。

(久良岐) これも洒落のやり損ひで狂句の初歩となつた句である。

仲人は母の後ろを度々覗き

(三允) 陰に肝腎の娘が居る。

(久良岐) 現代のおてんば娘の情とは雲泥、文部省で「女らしい女」を教育せんと力味出した所以。

一生に一度男へ嘗めてさし

(三允) 結婚の盃事である……(參照)來た晩に笑つた嫁をさつてやり……花嫁のぶするで無いの憎らしさ

(久良岐) 此頃の新聞にあつたが、東京驛の待合室で立合人なしの見合ですぐ意氣投合し、ソノ儘寢臺車で新婚旅行に上る連中が多いさうだ。かう人生の大事が安價に取扱はれては此何も定めし泣くことであらう。

(三九) 「一生の顏をめでたく赤めあひ……の句も共に泣くのだ。扨て譯準笑話」に「少女將レ嫁有レ詢二於嫂一、嫂曰、不レ可二勝言一、既而回驚、怨曰、忘語娘、及二重歸寧一、問夫婦之道、何神所レ創、曰諾册二尊、爲レ何問レ之、曰欲二上レ物報賽一也

仲人のあとから出來るおもしろさ

(三九) 所謂新しい女の共鳴すべき句である、おもしろさの下五の働き、嘆賞に値ひする。

(久良岐) 自由結婚、昔は遊女を女房にする中產階級、貧乏人の娘を夫人にする軍人などに、他家養女の名に於いてしたる者も澤山にある。

後家の文子守頼むが越度なり

(三九) 子守などに頼んだため、他の人に知れたといふのである。

わる堅い後家とは見立て違ひなり

(三九) 案外な話を聞かされた。見立て違ひの語は醫者の誤診から來たのである。

持藥さと朔日丸を後家は飲み

(三九) 朔日丸は婦人が毎月朔日に飲めば、決して孕まぬといふ丸藥の名である。それを持藥だと誤摩化して後家さんが飲んでるといふのだ「譯準笑話」に「江戸某店、賣二朔日丸一、婦人月旦服レ之、不レ孕云、村僕請レ活店人戲問、主婦使乎、答曰否、欲レ遣二卿里山妻一也」

掛とりの手をひいて行く俄か後家

(三九) 浮氣の沙汰と一蹴するは氣の毒である、頼みに思ふ亭主には歿くなられ、

何うして生計を立ててよいやら途方に暮れて居るその上に、亡夫存生中の借錢に攻められる、已むなく共貞操を犧牲にするといふのだ。未亡人再婚論者の共鳴する句かも知れない。……(參照)若後家の剃りたいなど、むごがらせ……掛取の來ぬが精靈への馳走……姑婆後家を立てたがきつい味噌

いく度か養子のかわる怖い後家

(三允) 何も恐ろしいことはないのにさと、後家さん本人に取ては不平であらうが、併し胸に手をあて、考へたなら、川柳を恨むのは間違ひでありませう。

(久良岐) 芋田樂など云ふ不純の養子など今でも世に存してゐる。

芳町で客札貰ふ後家の供

(三允) これは芳町へ後家さんが陰間を買ひに行つた時、後家さんに供をして行つた者が、芝居の客札を貰つたといふので陰間が主に役者の女形になる下地ッ子であることは別に述べて置いた。芳町は芝居のある二十町の傍である。芳町で年增の方は二役し……芳町で化けさうなのを後家へ出し……とあるが如く、陰間の中でも年の多いのが女の方へも出るのである。

(久良岐) 現今芳町に百尺と云ふ料理店がある、それは昔の陰間茶屋の跡だと亡き母から聞いた。

霜月の朔日丸は茶屋で飲み

(三允) 毎年十一月の一日には、芝居の顔見狂言が始まる、それを早朝から見物に行くので、霜月ばかりは芝居茶屋で飲むといふのだ。顔見は三代目中村勘三郎が始めたので、京江戸大阪を通じて行はれたのである。

好きな乳母本屋を叱り〳〵見る

(三尤) 何が好きなのか、何で貸本屋を叱るのか、何故叱りながらも手から離さずに見て居るのか、無粋の筆では適切なる説明に困難である。

扨て「南畝莠言」に「青藤山人路史に曰く、ある士人藏書はなはだ多し、その櫃ごとに必春畫一冊づゝ入置けり、ある人其ゆゑをとふに、これ火災をよくる厭勝なりと云々、此方にて具足櫃に春畫をいるゝといふ事も、かゝる事などによれるや」とある……がこれは性慾上から來たので、廣義に解すれば一種戀態的のものである。陣中に於ける性慾の衝動を春畫等に依つて緩和せしむると共に、徒然なる場合を慰むるの具としたのは、日露戰爭等の際にも屢々見聞させられた事實ではないか。

(久良岐) 「貸本屋無筆の讀むも持つてゐる」?の類句もある。

(三尤) 「貸本屋これはおよしと下へ入れ」といふのもある。

棟上を名代の乳母の尻へ投げ

(三尤) 所謂水氣があるので近所の評判になつて居る乳母が、棟上を見に來たので、餅を投げる男が、からかつて慰と、その乳母の尻を目がけ、投げつけたといふのである。

(久良岐) 名代は評判で名聲嘖々たる者を云ふ。

あれはもと乳母のずるゝべつたりさ

(三尤) お内儀の身元詮議、道理でケチだとか物が分らぬとか、うるさい世間の口と相場は疾に定まつて居る。

乳母のことは「守貞漫稿」に「乳母俗におんばと云半季奉公給銀百目許を與へ、夏は麻衣、冬は冬服を與へ、其間春秋には主婦の古服を與へ、諸費を給す、因に云、三

都ともに、半季奉公金を與ふ者は皆諸費を與へず、諸費給金にて便ゝ之、蓋家制にて給金の外に烟草紙等を與へ、髮結錢浴錢を與ふことあり、或は與へざるあり、皆家制による、唯三都ともに乳母のみ給料の外に服及び諸費を與ふ、蓋京坂にては乳母の兒存亡ともに其兒を養はず、又其費を與へず、江戸にては乳母の子存する者を好とし、これを養ふの費を與ふ」とある。

（久良岐）ズル〳〵ベツタリと云ふ江戸子の日常語さへ、今日は已に亡びんとしてゐる。

小便をいめばきりやうがごつとせず

（三允）「消渴の氣味かと殿も初手は聞き」「呉れなけりや彼のをしやれと母は云ひ」で、大名の妾のことである。手當が惡くなつたり。初めからよくない場合、わざと寢小便をして、嫌がらせ、暇をとる、そこで小便をせぬやうな妾を見つけよう

とすると、いゝきりやうのものが居ないといふのである。

（久良岐）かう云ふ大名旗下相手の妾に小便組の字名がある、ソレは川柳に依つて知り得た一の社會相の秘密である。

馬五六疋にお妾むかうなり

（三允）「お妾の一門あまた浮み出で」……といふ類句がある。馬五六疋と妾一人面白い算盤の彈き方ではないか、尙申すまでもないが、川柳でお妾とは、普通大名の妾を指すのである。

（久良岐）槍一筋と乘馬とは武士の表道具である。其馬五六疋にも向ふお妾は贅澤な物である。落語の三味栗毛を思出す。

腕の炙までは殿樣氣がつかず

（三九）命といふ字を燒き消した灸のあとには、殿樣御氣がつかれずに、お妾を御寵愛……（參照）「お妾の疵には一字ほつてあり」

美しい上にも欲をたしなみて

（三九）遊藝等のたしなみを欲に持て來たのが面白い、妾のことであらう。

（久良岐）少々道學じみた句であるが、理想から云へばお妾の跋扈は宜しくない。

檢校の妾ものごしよい女

（三九）昔は按摩鍼灸に非常の等差があつて、下座頭から、上檢校迄に七十幾段があり、檢校は更に一腐から十腐迄の等級がついた者だ。其檢校の十腐になると、宮樣と同格の待遇を受けたといふ。流儀にも杉山流、吉田流、石坂流、西村流などに分れた。中に吉田流は其元祖たる吉田久庵が元來醫者で眼開きであつた爲めに、

盲人を使はない、吉田流といふ眼明きばかりの按摩は之れから起つた。そして此流は決して按摩上下十六文と往來を流して歩かない。但し吉田久庵は文化年間に江戸に石坂宗哲といふ者が出た。此の者に星野良悅など、一緒に弟子となつたので、天保年間に吉田流を起したのだから、天保以前に詠まれた此句の主人公たる檢校は、無論盲人であるとして差支ない。尙鍼灸の治療をする時には、其前に必ず按摩をしてからでなければ、取り掛からぬといふ順序である。旁々此句の解釋が容貌のよいわるいが目の見えぬものに取て問題にならぬとする許でなく、ものごしのよいといふのが人の身體に接近しなれてゐる感覺の上から、普通の盲人と異なつたる鑑別の憑據となるのである、皮膚に於ける感覺神經末端裝置として、解、壓、痛、温等の感覺を分擔する各種のものが宿されて居るそれが檢校に於て、最も鋭敏に働くのは勿論のことだ。

（久良岐）檢校は母の亡父山澤檢校が胡弓の名手として水野越前守後援に依つて

最後の總祿と成つた、總祿は檢校以上の總理であり、兩國橋から本所一ッ目の辨天總祿邸迄警蹕を許されてゐた。琴、胡弓、三絃等に檢校あり、又千兩の金を京都へ上納して其位を得た金貸檢校がある、是は多く川柳によまれてゐる。

お妾は花の名所へ捨てられる

（三允）九郎判官義經さまは、靜御前を連れて逃げ……と奴さんの踊りにある通り、吉野の奥は一二の峽間、三四の峠、杉の壇といふ所まで分け入つたが、從士の心を慮て、初音の鼓を初め、形見の品々を取らせ、財寶を與へ、互に名殘を惜しみながらに、靜と別れたのである。吉野は即ち花の名所、但し史實からいへばそれが生憎と雪の時候であつたのだ。

（久良岐）吉野と云ふ名所の名が奥女中などの源氏名式に似通つて調和を得た感じがする。

武藏坊やつと御めかを引はなし

（三允）「お妾は花の名所に棄てられる」で、義經を辨慶が諫め、吉野山で靜御前と別れさせたのをいうたのだ「あの通りだと靜へは浪を見せ」といふ句もある。

（久良岐）義經公の愛妾靜御前を江戸の通人語でオメカと云つた所に川柳のユーモアーがある。

さんげ〳〵間男を致しました

（三允）「抑も相模の國雨降山大山寺は江戸を去る事十八里、良辨僧都の開基にて眞言宗高野山に屬す寺領百四十八石、云々と「江戸歳事記」にある、盆山といふのが七月十四日から開けるので、借金逃れの爲め參詣する横着者もあつた。「父は母は內で云譯け」「所詮足りないと大山さして行き」「精靈と女房を留守に急な旅」等に依

て、之を察することが出來る、お山で懺悔をするのだ、「さんげ〳〵借金で參りました、」「さんげ〳〵藤澤で遊びました」といふ樣なのがある內、間男は罪輕からざる側に屬するであらう。

（久良岐）類句「大瀧は一言もない所也」江の島金龜山を大山より見下して「石尊で見れば山號甲を干し」又「高山で恥はかけ共い、男」などあり。

びり出入大やもちつとなまぐさし

（三允）間男騷ぎである。大屋といへば親も同然、店子といへば子も同然の、長屋の出來事。それをよい樣に取靜める夫子自身に、心中疚しき點なきにしもあらず「なまぐさし」は申すまでもなく精進の身で魚を食ふことから來たので、所有生臭坊主が最適例である……（參照）二人とも帶をしやれと大屋いひ。

間男を見出して恥を大きくし

（三允）間男を見つけて騷いだはよいが、そのため世間の評判となり、却て餘計に面目を損じたといふのである。

（久良岐）間男の類句も可なり多いが略すことにする。川柳は人事本位の句故かゝる暗黑面の事件をも巧に取扱つてゐる。

間夫のはだしはきつい不首尾なり

（三允）跣足になつて逃げ出したのだから、間誤々々すると重ねて置いて四つにされかねない場合であつたと推察される。

ころび合ひまじりまじりと御用が見

（三允）御用聞きが來たのを知らずに居るのだ、知つたなら、「樽拾ひあやうい戀の邪魔をする」といふことになる。

（久良岐）「律義者まじり〳〵と子を出かし」此まじり〳〵が能く利いてゐる。

ころび合おふくろ樣のやうに見え

（三允）年上の女と年下の男、それも親子程の相違があるのを、緣は異なものお安くない仲となつた。

（久良岐）ころび合ひは、野合で、自由結婚の事である、現代でも下宿の書生さんと軍人の未亡人の家主と自由結婚をする連中に能くこんなのがある。

（三允）「譯準笑話」に「贅壻年弱、婦齒倍、藐視相陵、動輒罵曰、汝宜二以爲一レ母者、壻直置所レ慚、不レ堪二其辱一、人爲規下其蔑レ夫不二親愛一失二婦道一家不上レ參、婦曰、吾豈不二親愛一乎、實覩猶二レ吾兒一也」

のら出合行雁列を亂すなり

（三允）源義家の後三年の役に、役立てた兵法、伏兵あればそこに下りようとした雁が、列を亂して飛び去るといふのをのら出合に持て來た、其趣向の奇拔なため淫れた感じに陷るのが救はれる。

（久良岐）そろ〳〵文化文政度狂句にちかくなりかゝつた、句洒落が理智臭くなりかゝつてゐる。刺激が强くなつたのである。

間男といはれず和尙くやしがり

（三允）坊さんの隱し妻たる大黑の姦通事件、公然と問題にすることも出來ぬ、口惜しがるのも尤もな次第。

（久良岐）肉食妻帶は眞宗に限り許されてゐた其昔、「いゝ宗旨頭丸める分の事」

の川柳もあるが、眞宗以外の僧は女犯の罪として三日間日本橋に晒らし物になる恐れがある、其無念さ推知すべし。

(三九) 「遠碧軒記」に寺院のことが說いてあるが、中に法華宗の中山派と云は、古は妻帶なり、今の頂妙寺、堺長谷寺、本法寺など、この派なり、しからば古は妻帶にてあるべし、中山派なぜに妻帶なれば、中山は古山伏あり、其妻妻帶の山伏にて有ながら、日蓮の弟子になれり、この派ゆへなり、この派は別して祈禱をす、これには幣をきりて壇をかざるなり。とある。

辨慶が一度の相手名も知れず

(三九) 二十六夜の月待の夜、あまた泊りの云々とは義太夫の文句にある。西國二十七番の札所である播州書寫山圓敎寺に於て、修業中の辨慶當時の名鬼若丸は、

卿土岡太夫といふ者の娘、お信と通じたのである、因に辨慶は仁平二年四月八日、即ち釋迦如來の誕生日と日を同うして生れたのださうな。端唄二上り「源氏さむらい辨慶さへも、二十六夜のかりまくら、たつた一度でもうけし娘を、御身がわり」參照。

口說く奴あたりみいしくそばへより

(三九) 解に及ばない、それ丈けのこと。

(久良岐) 第三者として當事者を冷靜に觀察するとコンナ滑稽のシーンが割出れる。川柳は性をいかにも巧妙に滑稽化した點に毎々勝れてゐる。

籔入を霞に見初め霧に出來

(三九) 霞は春の籔入、霧は秋の籔入に例へたのである。春見初めたのが、秋に

なり、夫婦になる相談が出來たといふのだ「類柑子」に「今の代は人の品その掟も改りて、春と秋二たび父母はらからやから類縁にめであひ、花月艶容の氣伸をして、命の洗濯などことぶきあふ事ちまたにうたふ時にして、諸家その禁門をゆるめ里へ下るやぶいりといへるなり」とある、雇人の宿入は以前は正月丈けで、その二度となつたのは元祿の頃であらうか、但し句としての價値は「やぶ入の五月過ぎておひまが出」の方にある。

（久良岐）此句も大石眞房の「神事行燈」などに採用された句であるが、比喩の巧は認めるが時間的の内容がある爲め理知を待たねば妙を感じない句で狂句なる所以である。

きん王を洗ふ二才のにくらしさ

（三允）「譯準笑話」に「新僕年少、俊敏勤幹婦人嘉稱曰、汝實可兒、勞以其所二嗜、何物爲レ最、勿レ有レ所レ憚、僕拜二命之辱一、囁嚅搓レ手曰、第二則酒也」とある。

守りをば衣桁へ懸ける少年客

（三允）水天宮樣のお守か成田山のお守か、何の神樣佛樣のお守か知らぬが、右の肩から左の脇下へと肌身離さずかけてるのを、遊女屋で着物をぬぐとき、特に注意して衣桁へ懸けるといふのだ……。「十五日からおぼこの聲がはり」參照。

（久良岐）此句は現代になつて通り句として可なり人の知つてゐる句で、いかにも二才の小生意氣の狀態が、性格がよく浮び出てゐる。

十五日からはおぼこの聲がはり

（三允）盆か正月の齋日に、初めて遊里で遊んだからである。聲がはりのする位だから總ての態度が大人びてくる、そこで「きんたまを二才の洗ふにくらしさ」とい

ふ句も受入れられるのだ。譯準笑話に「郷問少年、遊二宿土妓所一、既二被責一曰、如レ此粗惡、奚可臥邪、妓曰、請擬レ在レ内賜レ忍」

樽ひろいよこねはちつと早すぎる

(三九) 酒屋の御用聞きが横痃を病んだ、漸く若衆となるか、ならぬかの年配であるのに、もうそんなに遊ぶのかと、ませた點を冷かしたのだ、衛生思想の進歩しなかつた當時、横痃如きは、男が一人前となる條件に數へられる位な、享樂的の社會相が現はれるのである。

貸本屋これはおよしと下へいれ

(三九) 却て見たいと思ふ心持ちを增させるのと、下へいれたので、何の本か見せたつてよいではないかと、借りる方でも内々承知して居ながら、無理に取り出し

て見やうとする。本屋の方では已むを得ず、ではお目にかけませうとやる、結局はこれはおよしが一の反語となるのだ。大人しい若旦那とか、後家さん……後家さんに限らぬが、女のお客に對する場合等の、本屋の駈引きである。

「外骨」の「猥褻風俗史」に

寛永十三年出版の「昨日は今日の物語」は挿畫なき落語本なれども、全篇の過半は猥褻談なり、編者が實見したる古版本中にて、最も古き猥褻談といふべきは此書なり。

次に猥褻繪本の初めて刊行されしは、明暦元年の「樂事秘傳抄」なるべし、同書跋文に

右此一札大明にて繪圖に書て相まちはる本我朝に來るといへども其旨趣心ゑんゆうひにして淺學の徒おこなひがたし、かるがゆえに其調まことに卑俗也といへども明朝のもじをやまと言葉にやはらげ人をして云々(中略)是唯天眞の玉質

をたもたしめ壽命をながくひさしくならしめんものみ

明暦元年七月下旬開板

とあるにても、此種版本の嗤失なるが如く察せらるゝなり。柳亭種彦著「好色本目錄」には「修身演義」（一名人間樂事）を春畵刊本の初めなるべしと記しあれども同書の刊行年代は不詳なり。

（久良岐） 昔は貸本屋が自分の背丈の中程位貸本を積上げ大風呂敷で背負つてお得意廻りをした。其貸本は太平記、曾我物語漢楚軍談等の通俗歴史物や落語、黄表紙、洒落本もあつたが、一番下に厚板の仕切の底へ春畵本を五六冊持つて歩るいた物である。人情本作者爲永春水も最初は貸本屋であつた。下五の「これはおよし」がいかにも貸本屋の人格をハッキリ現はしてゐる。自分も其昔牛込山伏町池田屋の主人や愛宕下町の村幸の先主人など知つてゐるが、いかにもソレラの口吻を眞寫してゐる。

（三九） 商賣がら御尤もな次第。

（久良岐） 此實暦安永時代には藝者は踊り子と呼ばれ珍らしい者であつたので、此句も意義があつて穿ちが新らしかつたのである。

お齒黑は藝子一生いやといふ

（三九） 上方即ち京阪地方では昔から今日でも、藝子舞子というてゐるが、江戸は最初踊子といひ、それから藝子、藝者と呼び、略して單に者ともいふやうになつたのである。句意は氣づまりな素人になるのはイヤだ、生涯面白お可笑く浮氣稼業で暮したいといふのである。扨て闘秘錄卷之七に鐵漿白粉の始は聖德太子からだとある。……（參照）おはぐろの口をひんもぐやうに拭き……やゝしばしあつて歯

姉さんと云ひやと藝者子を育て

箇黒姫事する。

あの蓮にかう居やしやうと腐れつき

（三允）上野不忍池の見える、出合茶屋における事件である。

（久良岐）淫蕩な後家などが多く他の男と出逢ふ不忍池畔の安待合の光景である。現代は郡部の景勝地に進歩した出合茶屋が多い。

（三允）出合茶屋に就ては「筆綾糸」に「それとはすこしもしらいとのむすびをしやんと御てんふう、ひとりのとしまはかねてより、茶屋のあないもしつたかほ、ついとはいればしけりえは、はづかしさうにもぢ〳〵と、あからむかほを見てとるほうばい、「サアさおあがりとあつかわな、あとにつゞいて二かいに上り、酒のあいてにいろこの小萬あけてのろけるこなたのざしき、なんのゑんりよも仲居がきて「もうしあなたをさいぜんから、おまちなされてあの小ざしきト、きくよりしけりへと

びたつばかり、かねてはなせしほうばいゆゑ「サアしけりへさんちつともはやく、おはなしと心のうちをおもひやり、こなたはいろこの小萬とふたり、一つびやうぶのとこのうち、こつちはしんの四でうはん」

饅頭になるは作者も知らぬ智恵

（三允）徳川七代將軍家繼の時代に、家宣の生母月光院に事へて居た老女江島と木挽町山村座の俳優生島新五郎との情事を詠んだので、生島が大奥へ納める菓子屋の蒸籠の中へはいつて通つたとの俗説に因み、作者即ち狂言作者も思ひつかぬ智恵だといつたのだ。當時の饅頭の蒸籠は澤山の註文の時に使つたもので、芝居のおくり物として座の前へ積み重ねたりしたから、蒸籠をもつて來たのは突飛でない。但し此の事は新五郎の弟の生島大吉が長持に潜んで某家の後室の許へ通つたを混同したのだとのことだ。余の俳句に

初芝居江島が情け今は仇

といふのがある。

（久良岐）「蒸暑うござりましたと新五郎」の類句がある、

（三允）よし町の繁華幾島いごの事……の幾島も新五郎のことを指したので、よし町は日本橋の芳町、昔は男色を鬻ぐ家が多くあつたところ、新五郎事件があつた後、よし町も繁華になつたといふのである。一寸關係がない樣だが、芳町で男色を鬻ぐ者を色子また野郎と呼び、年の若い俳優であつた……芳町で客札貰ふ後家の供……で、孀婦などもこれを買に行つた、その供の者に色子が芝居の客札を遣つたところだが、新五郎事件以後、手輕に遊び易い場所である芳町が、繁昌したといふので、饅頭の句の參照となすに足るのである。

色男四角な智恵で奥へ呼び

（三允）柄屋善六といふ用達商人の商略に卷込まれ、月光院の代參として寛永寺及び增上寺に參詣した折、山村座に芝居を見物し、同座附和事師の立役者たる俳優生島新五郎と通じてからの亂行を詠んだもので「饅頭になるは作者も知らぬ智恵」と同想である。即ち饅頭を入れる蒸籠は四角だから、四角な智恵といつたのである。

（久良岐）四角な智恵は理知で狂句と云ふべしである。

（三允）箱入の男が來たと島で云ひ……も此句に依て、其意味が明瞭になる、即ち新五郎が八丈島に配流となつたとき、島の人が蒸籠に這入つた新五郎を箱入と形容していつたといふのである。實際はさういはなくとも、さういつたとするのが川柳式なのだ箱入はいふまでもなく箱入娘から來て居る。

丙午遠い所から結納が來

（三允）干支を五行に配當すると、丙は火の兄であり、午も火である、方位に配

雷すれば丙は徹東であり、午は正南である、從て丙午は火の量なり、盛陽の量者

たものなので、この年には火災が多く、尙この年に生れた女は氣が強くて、亭主を食ひ殺すといふのだ。かゝる迷信、支那では五雜俎に「丙午、丁未の年には火災あり」とあり、わが國には「丙午の女は必ず男を食べると世につたへしが、それにはかぎらず云々」(男女大鑑)「或はいふ、女の丙午の年に生まるゝものは必ずその良人を食ふ云々」(燕石雜志)とある、誠に不文明な話だが現に大正の昭代、明治三十九年丙午の年に生れ、婚期に達してゐる娘達が、尙此問題で良緣が結べぬとは、實に困つた話である。

片見月になるを息子は苦勞がり

(三允)　十五夜、十三夜は吉原の物日である、それを十五夜には出かけたが、十三夜に行かれぬのを苦勞にしてゐるのだ、息子といふ性格がよく出てゐる。

(久良岐)　老人に聞くと民間で片見月を忌むのは遊里から起つたとの由。

母の文まづい顔して讀んで居る

(三允)　內容は母親の愚痴と、それに加へて父親が勘當するとひどく怒てゐるこなどが書いてあるのだ。

どうしようと思つて瞽女を連れて逃げ

(三允)　身から出た錆とはいひながら此始末、ところへ滑稽味も加つて來る。

(久良岐)「どうしようと思つて」と穿つた所が川柳の特長である、そこに可笑味があり輕味がある。

馬で來るので嫁ン女とはねるなり

（三允）田舍の婚禮。

（久良岐）類句「乘かけへ聟の田地を見せて行き」

三塔の勇僧月を二つ背負ひ

（三允）三塔の勇僧とは上野寛永寺の坊さんのこと、吉原に於ける月の物日の散財を二つ背負ひこんだのを、恰も大長刀をつき立てた山法師のことでもあるかのやうに、形容したお可笑味である。

（久良岐）古句の研究と云ふ事は自分が創立した仕事だが、最初は此句などにも惱されたのである、三塔は京都比叡山の東塔、中塔、西塔の三塔で、「勸進帳」に「辨慶は元三塔の遊僧」とある。遊僧は博學の僧侶である、叡山は天台宗、其叡山の寫しが東叡山寛永寺で、辨慶の勇と寛永寺の僧が吉原通ひの勇とは頗る矛盾を感じるこゝに川柳味が生じる、但遊僧が本義であるが、こゝでは月を二ツ背負ふから勇僧

と云ふ感じが重く受取られる。

緣遠い娘からだに作りあき

（三允）何といふ含蓄の深い句であらう。但シ此娘丙午などのためでないやう祈つて置く。

（久良岐）川柳の特長ある佳句

三會月もてゝ嬉しくない夜なり

（三允）初會、うら、なじみで、所謂もてるのは當然な關係からである。

（久良岐）類句「三會目心の知れた帶を解き」などある。

ある甲斐は御座りやせんと女房やき

（三允）御尤もさま……愚痴まじりが如何にも女房らしく同情される。

（久良岐）ある甲斐は古言、世の中に生きてある甲斐即ち生存の意義がないと云ふ事、主の遊蕩と反照した可笑味、輕い感じで受取らねばならない。

、いひ拔を皆女房に覺えられ

（三允）毎度のことで致方なし。

（久良岐）若い花見、涼み紅葉見、梅見などカコツケに友人と吉原通ひをした「正燈寺何枯川葉と見て通り」「梅見とは新版替りました嘘」「もう嘘も息子枯野に及ぶなり」又「女房に櫻々と唄はれて」

もてぬ夜は何をいつてもへゝんなり

（三允）まあ寄らずさわらずにして置くに限る。

（久良岐）遊女に冷遇せられる、こゝに吉原味の面白さがある、今日のやうな物品賣買のやうな吉原の時間制では何の興味も變哲もない。

卜筮が得手で居續け忙しさ

（三允）面白いところを捉まへたものかな、自分の相方の朋輩から、遣手先に至るまで、運勢を見てやるが、卜ひ者身の上を知らず終に銚子の月を見る居續けの暇つぶし。

（久良岐）今では古い客に雛妓の手の筋など見てゼウダンを云ふ人もある。

おめかけの聲梁の塵が落ち

（三允）大名の妾のこと、元との商賣はそれで分る、琴でなく、三味の方だ。

（久良岐）「お妾は都に彈かせ唄ひ出し」の類句もある、昔大名のお妾なとは民間

から一技一能ある美人を採用したのである。

よし町へ世俗に疎き客が行き

(三尤) 御殿女中や坊さんのこと。

(久良岐) 川柳の葭町は男色の蔭間茶屋が主である、近々梅蘭芳の劇を見て一句を得た「北京から來て葭町の色を見せ」

、間男はしまいゝと後家大丈夫

(三尤) 成る程定まつた夫といふものがないのだから。

(久良岐) コンナ句にも柳味は津々としてゐる。

藪入は春の殘りを口說かれる

(三尤) 秋の藪入のとき、春の藪入りに口說かれた樣きである、扨て春には何いふとこまで、あつたか。

、つかまつた時分は娘空財布

(三尤) 男にそゝのかされて逃げた娘を、漸く探し出してつかまつた時、もう身につゐた金目のものは捲き上げられてしまつてゐた。

(三尤) 三面記事、人情古今多くは變らない。

四つ手駕牛の小百も駈け拔ける

(三尤) のろ〳〵した牛を持て來て、四つ手駕の急ぐところと對照させたのだ。それも小百と持て來たので句が生きて來る。

(久良岐) 「猪牙は歸へるのに石舟一ッとない」の類想。

泊つたがあたら櫻の咎になり

（三允）花見のくづれで、とんだしくじり、頭を掻ての言ひ譯は。

（久良岐）謠曲「西行櫻」の文句取のしやれ、西行の……あたら櫻の咎にはありけるの歌句を取入れたのである。

朝つぱらいとしや母は質を置き

（久良岐）朝歸りの息子のため。

中宿は義理で勘當二日置き

（三允）今迄ためになつたに對して……

（久良岐）現代人には中宿が分らない、揚屋と置屋の仲介の宿の意、今の引手茶屋である、それすら分らない社中の青年がるるので自分も少々川柳に對して心細く思はれる。

年忌かづけがお局の宿下り

（三允）親の年忌にことよせての宿下り、單なる芝居見物は無難の部である。

くぜつ文半分ごろで畜生め

（三允）半分ごろが働いてゐる、それ丈けのこと。

（久良岐）半分頃で「畜生め」と口吻を寫した點に柳味がある。」

（三允）荒木田守武「獨吟千句」に

玉づさをなどながくくとつゞくらん

まゐらせ候やまゐらせ候や

女房持山を見い〳〵鹿を追ひ

（三允）鹿を追ふ獵師山を見ずから來たのだが、女房の機嫌も考へながらの女郎買ひ、穿ち得て妙。

（久良岐）理知の句、拵らへた句。

御嫌ひな性だと下女はなぐさまれ

（三允）一寸何かいはれても、知らん顏してツンと濟ましてゐるか、どうかするので、お嫌ひな性だと却てしつこくからかはれるのである。

十五夜は跡札のつく紋日なり

（三允）十三夜が控えてゐる……。

（久良岐）跡札のとシャレタ所が其頃は新らしかつたのであらう。

居續けの引揉んで置く母の文

（三允）誠に親不孝な話だが、時と場合で、餘計にさうなり易いのだ。

色文を拾つて御用百に賣り

（三允）いづれ下女か乳母のに違ひない、それを落した本人に百文で賣りつけたといふのだ。

（久良岐）「百に賣り」が妙を極めてゐる。

立派なるもの花嫁の丸裸

（三允）仕度は何もいらぬからと、先方のたつての望みは、決して仲人口でない

元は由緒ある浪人の娘を、大家の商人の若丹那が見染めたやうな場合である。

（久良岐）「裸だと云へば娘は可笑がり」等類句可なりある。

花嫁を百貫道具だとほめる

（三允）裸百貫から來たのだ。

、本の年いひなくと膝で押し

（三允）扨てその次は何とする……。

（久良岐）情景のよく現はれた句、川柳もかう云ふ點を捉らへる句を作くるには一寸年期が入る。

厄年を藝子むしやうに長くする

（三允）一作年も、去年も、今年も、恐らく來年も、矢張り同じく十九といふのだ。

（久良岐）「嫁の年捨鐘程は嘘をつき」の念入り。

夫とは向きを違へて畫寢する

（三允）女のたしなみがよく出て居る。

、操をば亭主の立てる氣の毒さ

（三允）家付の女房の氣隨から……。

（久良岐）句意はいかがはしいが、自分は男の貞操と云ふ風に見たら新らしい心持がある。

片道は清淨で行く御代參

(三九)「御代參ころんで歸るせわしなさ」で、歸りの片道は清淨とは申されない。

(久良岐)「御代參君と神とにチャラを云ひ」其他奥女中類句頗多し。

身についた果報と妾にくい口

(三九)「いきな息子妾をかゝへ友達をよび自慢心コレおきくお茶を持て來いといへば「アイと茶を持て出る、友達ども、これはすごいものぢや何方からあんな美しいものを伴て來たのだと賞めちぎつて歸れば息子よろこび「コレおきくいまの通人がいッそてまへをほめたおれがよく見るに風俗は家橘で顏は福助にそのまゝだよといへば。(めかけ)おまへも通ほどにもないチット似ればそのやうな事をいひなさる。(八三男作)

我胸を親に貸したき聟定め

(三九)「都清水の舞臺から美しい娘が飛とのうわさ京中へ聞えければ舞臺の下は大群衆かゝる所へ侍女あまた打つれて美しい娘が參詣、見物はソリャ彼れじやとジャ〳〵といふ中をかの娘は押分け〳〵本堂へまゐり暫く拜むで被衣着ながら舞臺へ出て高欄に片足かけ方々見廻し〳〵、アゝ、今日はどうやら飛ごゝろわるい止しにせうと供人打連れ立歸る、又翌日もその通りにて歸りしが、道々侍女とさゝやくを聞けば、あゝ殿達をたんと集めても美い男はないものぢや」、(臍可茶)

おそろしい角は蠟燭三本なり

(三九)「丑の時參り神木に灸をすへて居る、宮守見つけ、なぜ釘をうたぬぞといへば、なにを隱しませう、わたくしが呪ふ男は糠屋、」(咄安寶)

女房のおこつた夢を猪牙で見る

（三允）夢にしてからが見る丈け感心。

（久良岐）作意の見え透いた句。

客分といふ分の字に說があり

（三允）御披露は後廻し。

（久良岐）こんな輕い味の出る所に川柳味がある、江戸氣分も見える。

看經のあいだうれしい顏ふたつ

（三允）「看經がすむと居ずまへ嫁なをし」で、ッー、カーである、「むせうに無理をいふて嫁をいじめる姑あり、あの無理は如何したら直らうやらと、明暮嫁の苦勞たえぬところへ、町內から寄合をふれて來る、ハイあるじが留守でムりますから歸りましたら申聞せませうといふを、姑ははや鳴り出し、おれが內に居るに何でもおれにはひし隱しにする、何の寄合ぢやと叱られ、嫁はさそくに、イヤ他の事でも厶りませぬ、此町內に嫁をいびる姑が二人あるほどに、意見をして事のないやうにせうといふ寄合で厶りますといへば、ハテナいま一人は誰ぢや（烏の町）……參照「珠數袋嫁けいはくの初めなり」

仲人は雨までほめて開くなり

（三允）「こゝに梅の仙人と名けたる古木、庭のすみの姫百合を見そめぬ紅葉さんを仲人にたのみ金錢花を持參にむこ入をしける夜、をりしも植木屋木鋏をもつてはいりければ、花どもこれを怖れて小さくなッて居るゆゑ「植木屋」ハ、ァ今宵花聟の來るさうな、これを無情に切るでもないと、すた〳〵歸りければ、仲人かほをあ

け、そろ〳〵おひらきにいたしませう、」（江戸自慢）……（参照）「行燈へうつして仲人暇乞」

双方の親こんなではあんなでは

（三允）「瓜ざねを見せて南瓜も取かへる」といふ句がある「とんだ御幣かつぎの男ありしが今度恵方より嫁をもらはんと結納も日出度濟、さて婚禮の夜となり、かの嫁の衣裝も寶盡しの惣縫ひ、下着は千兩箱、掛鯛縁起の百兩などの惣模様、こいつは奇妙にめでたい嫁入だと、盃も濟で綿帽子をとると、お多福。（花間笑語）……（参照）「する長くいびる盃しうと差し」

、四百づゝ兩方へ賣る仲人口

（三允）嘘八百を二分してのことである。

（久良岐）これも下手に取ると狂句になる、輕い感じのシャレで受止めておかう。

嫁の年捨鐘ほどの嘘をつき

（三允）時を知らせるに、初めの三ッは所謂捨鐘で算用に入れぬところから來たのだ、

小謡を急に四五番のみ込せ

（三允）婚禮についてゞある。

（久良岐）落語の「高砂や豆腐ィー」の滑稽を思はせる。

相惚れの仲人實はまはし者

（三允）當人同志の肝膽は疾くに相照らしてるのだから、此仲人は樂なもの……

…「誰をかもなかうどにせむ高砂の松も昔の茶のみ友だち」(蜀山人)

(久良岐) 佳句

、行燈へうつして仲人暇乞ひ

(三允) お開きまでは燭臺であるのだ。「白鷺の鴛鴦になる夜のはづかしさ」となつて、仲人の役目は目出度相濟んだ、まづこれでよしといふ心持が現はれてゐる。

(久良岐) 情景が出てゐる。

名代はなだめつくして呼びにゆき

(三允) 名代では何うしても承知せず、愚圖つてゐるので仕方なしに、馴染の相方を呼びに行くといふのである。……名代の語については、曲亭馬琴の「松浦佐用媛石魂錄」に「上畧今日内管領をもて、執權の名代とし給ふと聞ゆ、この名代といふ

事は古語か俗語か、いづれの時にいひ出せる、答給へと詰問ふに、秋布微笑て、こは今の俗語にあらずいとふるくよりいふ事と見えて、古事記仁德天皇の紀に、大后石之日寶命の御名代として、葛城部を定む、太子伊耶本和氣命の御名代として、壬生部を定む、水齒別命の御名代として蝮部を定む、大日下王の御名代として、大日下部を定む、若日下王の御名代として、若日下部を定むと侍り、かゝれば名代といふ事は仁德天皇の御時より已前に、いひもて來れるなりと答れば、兵太は忽地に閉口し、云々」とある。

(久良岐) 佳吟

羨んで爺を起す姑婆々

(三允) 句意解に及ばずだが、平素嫁いぢめの意地惡るな婆々アだといふ憎しみが反照される。

（久良岐）こんな句になると現代人にスグ理解される。

馬喰町給仕の手でも握らせず

（三允）馬喰町といへば、田舍の客を相手にする宿屋を指すのである。一方吉原等の歌舞の地との對照からして、川柳味が出て來る。……（參照）「諸國から草履ふみ込む馬喰町」

（久良岐）兩國馬喰町附近に地方裁判所たりし公事屋敷が有つた。訴訟事件で百姓が馬喰町の旅人宿に長く宿泊するのが例になつてゐる「國々の理屈を泊める馬喰町」など澤山類句がある。此研究は「川柳みやこ」第二號に川柳兩吉と云ふ人の考證や一部であるが揚げられてゐる。

御殿者來て下んせを忘れかね

（三允）御殿女中と陰間との關係である。忘れかねが利いて居る。

（久良岐）「來て下だんせ」と云ふ詞は當時歌舞伎者の詞と見える。歌舞伎役者類似の色子と云ふ陰間が葭町に多かつた。川柳に葭町と云へば陰間の事で、明治の料理店百尺は其茶屋の遺蹟である。支那の役者に此陰間が多い。ソコで過日梅蘭芳の見物は出かけ一句を得た「北京から來て葭町の色を見せ」

天井を男の見るは腑甲斐なし

（三允）何のとき男が天井を見るのか……一考を要する次第である。

初會から食はせてたいこ二歩もらひ

（三允）「初會にはみだりに臺へぶちまける」で、客の前で物を食はぬのが普通であるのを、かほどまで打解けさせたのは座を取持つ幇間の働きであるといふので、

御褒美にありついたのだ。「色道大鏡」の「寛文式」には「太夫天神は申すに不及、圍ひ端女郎に至るまで、酒の外物くふ事曾てある可らず、何程馴染の男心易き中にてもゆめ〳〵物くふ可らず、もし水増水などして、是非といひたらば一口などは吸ふべし、湯漬やうの物も無用の事也、唯すゝまぬと云ひおくべし、臺所の調度ふつゝかなる物の名、口にとなふべからず」とある、次には二歩もらひの問題である。何故二歩を持て來たかといふに、川柳はかゝる場合單なる偶然を許さない、即ち「吉原は何でも一分する所」「勘定のしよさ何でも一歩なり」で祝儀は皆一歩であるのだ。「四手駕月下の門で一分とり」「一分丈笑ふとやり手元の顔」「喰積が小癪に出來て一分ぬき」「滿足に鍋をするゐると一分なり」「紙屑も一歩に太皷持は賣り」の如き比々皆然りである。そこで此句の二歩といふのが、破格の表彰であるといふことに合點が行くと共に、二歩といふので柳味の津々たるを覺えるのである。

とかまつて下りなと新造聲をかけ

（三九）年寄客と階子段……。「新造は入歯はづして見なといふ」など、年寄客の例句は澤山ある。井原西鶴の「好色盛衰記」に、剛慾生活から頓悟して、米壽に近い老人が、太夫買ひに打込み「氣を持ちて〇入を望みける、迷惑ながら沙汰なしに身を任せるに、足の伸かゞみ成難く、身をもやし泪を零し、三十年前に此の志あらば仕たい事をしたに」と、それから終には、此老人太夫の膝を枕に大往生を遂げたとあるなどは極端な話だが、參照に値する。

（久良岐）「新造の客は山屋の事といひ」吉原山屋の豆腐

手放しでつけさしを呑む馴れた者

（三九）格子先の吸ひつけ煙草であり、地廻りの特徴が遺憾なく現はれた。先代

市川權十郎(鯉江)の話に「役者は形を宜くすることに注意するのは勿論ですが、チョイとしても手拭の冠り方、煙管の持ち樣、皆な其役の壺に嵌めて行かねばなりません、豐烏屋なども、切腹する時は左の手次第で、若衆にも、親爺にも侍にも、百姓にも自由に仕分けることが出來る、と云つてゐましたが、萬事は其通りのもので――煙管を持つのにも、雁首をつまむと百姓になり、吸口の方を持つと先づ大工なぞに見える、それから中の指三本を羅宇の上から掛け、子指と拇指を開いて下を支へると云ふ大仰な持ち方は殿樣なので、侍も矢張是に限らうかと思ひます、商人ですか、それは羅宇の先きの處を下から二本で斯う挾む――(と形を仕て見せ)處が一つ間違つて殿樣が雁首でも掴まうものなら……イヤハヤ……」これは杉膚阿彌が明治三十七年六月一日發行の文藝倶樂部(第十卷第八號)に發表したものである。

もてんとすべからずふられじとすべし

(三九)「稚獅子」に「コレおれは此頃新町がしのだるまや、といふうちへ行く、てめへも一晩つきあつてくれ、ヲヽゆくべい、なんといふ女郎だ、葦の葉といふ女郎よ、さぞ手のあるやつだらう、ナニサだるまやの内に手のある女郎はない、おれも今は悟りを開いたから、むづかしいこともいはず、只もちあそびに買ふはかりだといへば、ヘンもちあそびもすさまじい、おきやァがれ

(久良岐)川柳の變格である、一氣に讀下す所に無限の面白味がある、

(一ウ)城でさへ況んや藏においてをや

(三九)梅暮里谷峩の「孝女二葉錦」に「春はたゞ上野飛鳥の花のみか」こゝに榮えを三吉野の、ながめにまさる仲の町、千本櫻爛漫と、さくやさかりの山吹も、黃金

色そふ夕かげに、あゆみはたえぬ大門口、歸るもあれば來るもあり、茶樓が送りの提灯は暗の川邊の螢の如く、嵩へが迎ひの提灯は、月の出汐に異ならず、ものいふと言はぬ花ある賑ひは、蓬萊宮裡の仙女が室、秦の三十六宮に、集まる美女が三千の、粧ひかざる有樣も、かくやはあらじ嵐ふく、三室の山のもみぢ葉は、流れて立田の錦となり、吉野にあらぬよし原の、花のさかりは諸人の、立よりて見る籬の外、匂ひ馥郁香は紛々、伽羅の油や仙女香、丁子車の齒磨で、みがきあげたる白齒の矢的、ねらひ外れぬ見立が肝心、いりくる〳〵廓の繁華」とある、かう讀で來ると藏位傾くふは何の不思議もなくなるではないか……。扨て傾城の由來は詩經に「哲夫成レ城、哲婦傾レ城」、漢書外戚傳に「北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一、寧不レ知二傾レ城與二レ傾レ國、佳人難二再得一」とあるに原くのだ。因に詩經の哲婦は褒似を指し、漢書の佳人は李夫人を指す、兩者共に妖美なる婦人である。……(參照)「紋日前城より首を傾ける」

(久良岐) 此句作意の見え透いた句。

不承知な娘額へ皺をよせ

(三允) 見合の場合である……十返舍一九の「所緣の藤浪」に「男女の緣は日の本の神々、毎歲出雲の大やしろにあつまり給ひて、それ〳〵に赤繩の因をむすび給ふといひつたふ、されや花の都の艶女も、雲井路の奥ふかき國より聟をむかへ、あづまの人のしらぬ火のつくしより嫁をとるも、さだまれる緣にして、さだまらざるも又この道なり」とある。

(久良岐) 少々說明に墮して氣分感が出てゐない。

おさまらぬものだと見世で嫁の事

(三允) 商の家庭……。

（久良岐）佳吟。

見に來るも知れぬと顔へ剝げる程

（三允）賣物に花と無暗矢鱈に塗りたてる、當人よりも母親の心づかひが詠まれてあるのだ。ところが次の如き說をなすものがあるから、御參考迄に……何事でも自然でなければ味のないもので、女の皮膚だつて黑ければ黑い儘、挑發的なものだ、女の中には生地のわからない程コテ〳〵と塗りてゝ得意になつて居るものがあるが、あれなぞは挑發法を知らない、あはれむべき女で、化粧するなら生地の色を失はない程度に薄くやらねばならぬ。さうすると自然と人工との兩方面から益々挑發的になるものだ、黑ン坊の女は世界中で……云々。

据つてて嫁は着替へてずつと立ち

（三允）何處に高師直が潛で居ぬでもないから……。

（久良岐）舉動を巧に描寫してゐる。

燈心を誰に聞いたか嫁は飲み

（三允）一說に嫁がしば〳〵孕むのをつらがつて、燈心を飲めば孕まぬとか何とか敎へられたのでそれをのんだ……といふのがあつたが、之れは月經中、燈心を二三本餘むと一時閉止することが出來るといふ呪ひから來たのらしい、月經に關する呪ひはいろ〳〵あつて、花柳界などで情人と遇ふ日取りの上から、是非日延べさせたいと思ふとき、小豆をその日のべする日數だけのむとか、更に突嗟の際には冷水一杯のむとかいふ類だ、で此句を月經と解した方が誰に聞いたかが、一層面白くなつて來る。

人目をも思つたは後家初手の事

（三允）「後家の一人暮は御法度の由承る（中略）近來は素人の町家、後家の方暮らし能しと見えて多く町々にあり、女筆指南も多し、只事にあらず、町の女房は昔は前帶にしたるが近來は後帶多く見ゆる、又帶もなく前垂許りで暮らし居るも多し」（飛鳥川）

あつけない壹歩の螢飛びしまひ

（三允）素一歩の落膽察するに餘りありだ。

靡かぬと鎌でおどかす麥の中

（三允）野良出合の成否此一擧にあり矣……である、併し之れは江戸ッ子が野良出合を想像しての作爲の跡餘りに露骨であつて、同じ野良出合でも「麥畑ざわ〳〵と二人逃げ」の方が技巧の上では優つて居る。

（久良岐）作意の句

心待ち衣通姫が元祖なり

（三允）和歌の神たる玉津島明神は衣通姫を祀てある、衣通姫は小野小町と共に日本歴史上の美人の代表者と做されてある、稚野毛二派皇子の女、允恭天皇の皇后忍坂大中姫の御妹である、そこで實際の名は弟媛、姿容純美、光艶衣を徹すやうだといふので、時人因りて衣通姫と申上げた、允恭天皇の七年、天皇姫の美なるを聞き、皇后をして强てこれを奉らしめた、姫時に母に從うて近江國坂田にあつたが、皇后を恐れて敢て至らなかつた、天皇舍中臣烏賊津を遣はして京都に召されると、皇后やゝ不平の色がある、天皇は之を憚つて宮中に入れないで、宮を藤原に作つて姫を

置く、翌年二月天皇嶺に藤原に幸して之を窺ふ、とも知らずして姫は天皇を慕ふの歌を詠じて「わがせこの來べき宵なりさゝ蟹の蜘蛛のおこなひ今宵しるしも」といふと、天皇即ち和して「さくらがた錦の紐を解きさけて數多は寢ずにたゞ一夜のみ」と詠じた、これで此句の由來は明瞭となる……(參照)「暗やみへ衣通姫は穴を明け」

醫者よりも禿の力癪になれ

(三允) 端唄本調子「戀しゝがつひ癪となる、胸にさしこむ窓の月、今や來るかと待つ身もしらで、またぬ一聲ほとゝぎす」

暗がりでむね上をするたかの妓夫

(三允)「およんねんしと材木がものをいひ」「材木屋騷ぐと妓夫を呼びつける」などゝあつて、夜鷹はよく材木置場の虎落などで商賣をする、この夜鷹の妓夫が材木

の位置を都合よく直すのを棟上げと晒落たのだ、たかは夜鷹の略稱、扨てこの妓夫であるが、之れは吉原の妓夫から其名が來てゐるのだが、「夫婦別あり鷹となり妓夫となり」で、多く斯樣な關係のものがなつてゐるのだ。

(久良岐)「材木屋騷ぐと妓夫を呼付ける」の類句あり。

材木が賣れて總嫁へ月がさし

(三允) 本城がなくなつたので、月の光を遮るものもなく、夜鷹の身體が照られてゐるといふのだ、「耆山和尚の物語に、赤羽先生門下の諸生のあつまりて語るを聞けば、狂詩を作るといふ、何の題と問へば「夜鷹」を咏ずといふに、先生微笑して、二十四文明月夜と朗吟して過ぎられしとぞ」(太田南畝)

(久良岐) 狂句味、作意の句。